

上ト2K-11

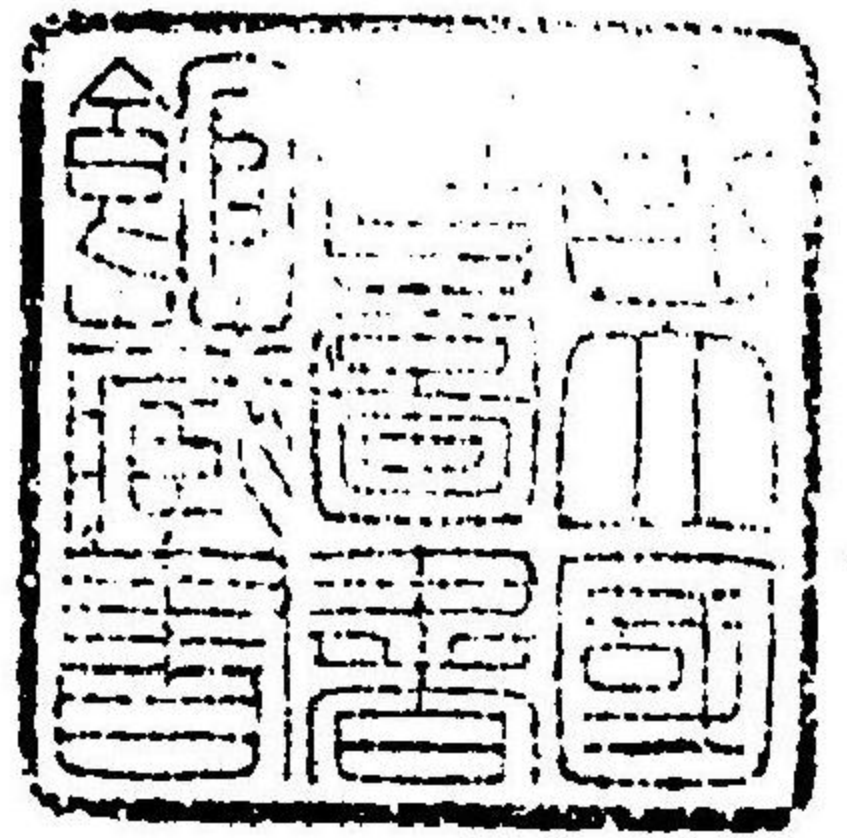
中邨秋香著



皇國文法釋義

發兌 大日本圖書株式會社

8/5 N 428 R  
357



261330

皇國文法釋義例言

本書はもと體活言解と題せしものにて、明治五年中梓行せし活言圖は即ち其活言解其の書は體言解、活言解の二に分ちしなり)に添へつるもの、今の用言圖の初稿なり、此時體活言解も上木せまほしきよし、書肆は言へりしかど、自他活用の原則及び音便の事など、當時いまだ思ひ得ず、又含蓄の事は、其頃稍考へ得て、彼の圖の附録にも、かつく言ひおきつれど、猶ほ疑はしきふしなきにしもあらず、かたぐにて果さざりき、其の後時にふれ、事に當りて、補ひもし、削りもして、反古のやうになりたるを、去ぬる廿九年より思ひおこして、暇ある毎に書きおこしたるが、こたび成りたるなり、

本書、本文はこたび發刊せし皇國文法にして、そは主として中

例言

學以上の文法教科用書の爲めに、著せるものなり、而して此釋義は、即ち其註文にして、本文の左に註するもの是なり、こは専ら教師の参考、及び獨修者の階梯として著はせるものにて、著者意見のある所は、悉く此釋義中に記述しおけり、古來語學書中に示せる語例は多く古歌をもてす、これ其の當時語學を修むる者は、概ね歌學の爲めにせしをもてなり、こいへども、今日の文法書の如きは、さはあるべからず、さるはもこより歌學の爲めにあらず、又國文學の爲めにもあらずして、専ら日常應用の爲めにするものなればなり、是れ本書に示せる語例、つとめて尋常普通の語に依る所以なり、言辭のうち古言及び古言ならざるも、普通一般に行はれざるもの、例へば古言にては、上二段のかすう、提 普通に行はれざる

るものにては、助動詞の、めり、べみべらの類は古歌古文に就きて例證せり、又古言にして平安朝以後に見えざるものは、上下に鈎線、即ち( )を施して標別す、

接尾語助辭の如きは、用格往々詳かならざるものあるをもて、概ね古歌古文に就きて、例を示す、但しその例は、歌よりも寧ろ文を取るものは、文は歌より、やゝ日常の應用に資くる所あるものなればなり、

引證の古歌古文全體の意味を知るを要するものは、一首一段を挙げ、その他は上句下句、又は數句を撮記す、

引證の書名、萬葉集は、萬八代集もまた各其頭字のみを記す、古今集は、古、後撰は、後拾遺は、拾、後拾遺は、後拾、金葉は、金、詞花は、詞、千載は、千、新古今は、新、また空穗物語、源氏物語、榮花物語は各其

の巻の名を記し、(俊蔭、帚木、浦々の別、の類、但し源氏の蜻蛉、蜻蛉日記と紛れざらんが爲めに、源蜻蛉と記す、其の他は土佐日記は、土佐、大和物語は、大和、好忠集は、好忠、山家集は、山家、などのごとく記す、伊勢物語は伊勢集と紛れざらんが爲め、伊勢物と記す)

本書欄上に標記する節(第一節より、第五〇六節に至るものは、畢竟参照の索引に便するまでのものなれば、之を立つるに條規を設けず、解説長きは之を割きて數節とし、其短きは一項をもて一節とす、

世の文法書中、文章篇を設けて、文章の組織法を説き示すものあり、是元來西洋文法より出で來しものにて、西洋文法は文章の組織に依りて、言詞の性質變轉するものなれば、文法を説く

につきては、必ずその組織をも示さざるを得ざる事なれども、我國の文法は、本書總論にも述ぶる如く、組織に依りて性質變轉する等の事なく、例へば名詞、副詞は、いづくにても名詞、副詞、動詞、形容詞は、いかなる場合にて、動詞、形容詞にして、疑問詞のいくいかでの類の、名詞、又は副詞となり、動詞のつとめてきはめて、形容詞のよくよろしくの類の、副詞となるもの、如きは、文の組織即ち文の組立に依りて變ずるにあらず、言辭の組織(即ち詞の言廻し)によりて分るゝものなることは、本書各條下に於て示すが如し、極めて單純なるものなれば、隨て文法は、文法、組織法は組織法、ごおのく互に區別するを得べく、唯文法上より組織法に關し、知らざるべからざるものは、枕辭、言掛、倒置挿入の四法のみなりとす、

蓋し謂ゆる文章篇を設くるもの、豈徒に彼の擧に倣ふが爲の故ならん、必ず一は彼の用言の如き、組織に依りては副詞と變ずなどいふ、西洋文法説に關聯し、又一は、之をもて文の主位客位を分ち、説明、修飾、補足、等諸語の分解によりて、自他の用法等を誤らざらしめんとするに出づるものなるべし、雖も、前者の説は、我國の文法は、組織に依りて言詞の性質變ずる事なし、といふ論に於て、自然消滅すべく、後者は、本書動詞の初に於て説き示せる、自他活用の文法に熟すれば、決して用法を誤るべきに非ざれば、かたゞ之を設くるの必要なし、故に本書に於ては、文章篇を設けず、枕辭以下の四法を附録として編末に示す、但し我國文の組織の如きは、我國文の組織法あり、之を知るは文學上必要ならざるに非ず、雖も、文法と混淆して授くべ

きにあらず、(文法と混淆して之を授くるは、徒に學者の腦力を攪亂し、益なくして害あるものなり)故に文章組織法の事は、余別に皇國文格の著ありて、委しく之を述べおけり、  
本書本文なる皇國文法に於ては、文法上須知の事項は敢て之を畧せず、記述せしをもて、自然教課時間に適せざるものあるべし、雖も、文字、名詞、接尾語、天仁乎波、聲音、等の諸篇の如きは、教師の差畧を以て、儘其概畧を示し、殊に文字篇中、音便以下、及び附録なる枕辭以下四法の如きは、尤も其要畧のみを示して可なり、唯動詞、形容詞、助動詞等の用言に於ては、能く其作用を説示し、又係辭はかの文章篇に換へて、能く其規則に習熟せしめんことを期す、さるは文章篇は之を授くるも、文法上一も益なく、たまゞ害あるものなること、前に述ぶるが如くなれ

ご、係辭に於ては、文法上最も緊要の事にて、一たび之を誤るごきは、文をなさざるに至るものなればなり、さて又副詞、含蓄の如きも、之に次ぎて能く其の大體に通ぜしめんを要す、引證の歌文は、唯其の用法を示さんが爲めなれば、授講上には之を略するも可なり、又釋義中微細に渉る説の如きは、固より教師及び獨修者の參考に資するものなれば、授講上には之を畧すべし、凡そ文法を教授するの要、専ら言語連綴の規則に熟練し、之に依り自然全體の法則を默契會得せしむるに在り、微密の理論は學者の腦に印し難きのみならず、たまく大に記憶力を攪亂するものなり、畢竟文法を授くるは、猶ほ珠算を教ふるが如くすべし、珠算を教ふるの方、二一天作之五といひ、三二六十之二といふもの、一々其義を解釋して、除法を授けんご

せば、學者は其の煩に堪へずして、能く之を得るものは鮮かるべし、其の義の如何に拘はらず、二の除にして一を得れば、二一天作之五と呼び、三の除にして二を得れば、三二六十之二と呼び、乗除も只管呼聲に依りて其法に熟せしむれば、容易に之を學び得るに至る、文法を授くるの方も、亦此の如く、煩雜なる解釋の如きは、成るべく之を避け、一に規則に依りて、自然の默契會得を期すべきなり、

本書編末(第五百一節以下)に掲ぐる應用法は、本書に於て説き示したる諸規則を、實地に應用せしめんが爲めに、二三の歌文に就きて、用言圖をはじめ、體言、助辭、其他の標目を一々其歌文の傍側に注記せしむるの方法を言ふ、注記すべき符號は、其條下に掲げおけるをもて、教師は釋義中示せる例に依り、一々其

標目を注記せしめ、誤る者あればよく説示して之を正し、更に適宜の歌文を擇み、之を生徒に授けて注記せしめ、以てこれに練熟せしむべし、此法始めは稍煩碎の如くなれど、稍熟すれば容易に之を爲し得らるべし、是れ實に我國文法を學ぶ捷徑にして、活用を知るの道これより近きはなく、前に謂はゆる規則に練熟して自然の默契理解を得るの法全くこゝに在り、故に足代、權田の二翁、義門、正音、兩師等、皆此法に依りて學者を教導せられたり、

本書の體裁は、一に大槻文彦氏の廣日本文典に倣へり、さるは其上欄に節を設け、また釋義の文字を小にせしなど、参考上および攻究上、便利なる體裁なればなり、

本書の順序方法に依りて教授するときは、學者の業を得る、甚

だ容易なるは、著者が年來親しく經驗して疑はざる所なり、

明治三十一年一月

中 邨 秋 香

# 皇國文法釋義目錄

總論(第一節).....	一頁
西洋文法折衷說(第二節).....	二
係結の論(第三節).....	五
助動詞の事(第四節).....	五
助辭接尾語の事(第五節).....	七
自他活用の事(第六節).....	七
係結變格の事(第七節).....	八
文法上須知要目(第八節).....	九
文字(第一〇節).....	一一
象形文字(第一〇節)音訓.....	一一
國字(第一一節).....	一三
音標文字(第一二節).....	一五



片假名(第一三節)作者、名義、大和假名……………一六

いろは歌作者……………一八

平假名(第一四節)作者、山雲假名、草假名、女手……………一九

符號字……………二一

五十音(第一五節)作者、父母子三音、原音發動聲……………二三

濁音、半濁音(第一七節)本濁、連濁、七十五音……………三三

鼻音、促音(第一八節)んむ區別……………三四

拗音(第一九節)……………三六

第一表拗音表……………三六

延約(第二〇節)反切……………三八

音便(第二二節)……………四一

體言音便表(第二三節より第三一節)……………四四

用言音便表(第三八節)……………六二

轉音(第三九節)……………六三

略音(第四〇節)……………六六

言語(第四四節)體言、用言、助辭……………六八

十類、四法……………六九

名詞(第四五節)有形、無形、實名、虛名……………六九

普通、固有(第四六節)……………七〇

單稱、連稱(第四七節)……………七一

形狀名詞(第四八節)……………七二

數名詞(第四九節)……………七三

未活詞(第五一節)……………七五

活語名詞(第五三節)……………七七

第二表活語名詞表(第五四節).....七八

代名詞(第五五節)人代名詞、指示代名詞.....八二

第三表代名詞表.....八三

疑問代名詞(第五九節).....八五

副詞(第六〇節).....八六

副詞の名稱.....八七

體言又は用言及び其外より成立つもの(第六一節以下)八八

動詞形容詞より轉ずるもの(第六五節).....九三

一項又は數語の上に位するもの(第六六節).....九五

動詞形容詞副詞の初に副ふもの(第六七節).....九六

疑問副詞轉じて名詞となるもの(第七三節).....一〇三

名詞に據わるもの(第七五節).....一〇五

典例一斑(第七六節).....一〇五

用言圖.....一一〇

動詞(第九〇節)將然、連用、截斷、連名、已然、希求.....一一一より

係辭、受辭(第九九節).....一一六

動詞、助動詞の時(第一〇一節)未來、現在、過去.....一一九

第五表三過去表.....一二〇

動詞、助動詞の自他(第一〇五節).....一二三

能、受、役、被役動(第一〇八節以下).....一二三より

第六表能、受、役、被役動表(第一一二節).....一二六

第七表能動以下動詞連續表(第一一四節).....一二七

第八表自動以下六種活用表(第一一五節).....一二九

第九表能、受、役、被役、自他明細表(第一一七節).....一三五

崇敬詞(第一一八節)……………一三六  
 上一段活(第一二二節)……………一四〇  
 下一段活(第一二七節)……………一五〇  
 上二段活(第一三二節)……………一五六  
 下二段活(第一三七節)……………一六六  
 四段活(第一四三節)……………一七六  
 變格(第一四九節)……………一八六  
**形容詞**(第一六四節)……………二〇三  
 形容詞の受辭(第一六五節)……………二〇四  
 けあけ、みあみ、さあさ(第一六七節以下)……………二〇六  
 形状名詞を形容詞にする法(第一七一節)……………二一〇  
 形容詞の活語名詞(第一七二節)……………二二一

**助動詞**(第一七九節)

用言圖上欄(三九)より(四三)まで(第一八三節)……………二二六  
 るらるすさすあむ……………二二七  
 能、受、役、被、役動(第一八五節)……………二二八  
 崇敬詞(第一八六節)……………二二九  
 用言圖上欄(四四)より(四九)まで(第一八九節)……………二三四  
 四四 めり(第一九〇節)……………二三五  
 四五 感歎のなり(第一九二節)……………二三七  
 四六 決定のなり(第一九二節)……………二三九  
 業平なる人顔回なる者のなる……………二三九  
 四七 決定のたり(第一九三節)……………二四〇  
 四九 輕過去のたり(第一九四節)……………二四一

四九けり(第一九五節)……………二四二

同五〇より五三まで(第一九六節)……………二四四

五〇てつづるつれ(第一九七節)……………二四五

五一けき志志か(第二〇〇節)……………二四八

五二なにぬぬるぬれ(第二〇一節)……………二四九

畢のなんご願のなん(第二〇三節)……………二五〇

五三せしするすれ(第二〇六節)……………二五二

同五四より五五まで(第二〇八節)……………二五四

同五六より五八まで打消(第二一一節)……………二五八

同五九(こそ)第二一八節……………二六四

同六〇願望のな(第二一九節)……………二六六

同六一より六三(第二二六八節)……………二六八

接尾語(第二二六節)……………二七五

第十表接尾語承格一覽表……………二七五

助辭(第二八二節)一音のものは助辭種別承格一覽表につきて見るべし……………三三九

第十一表助辭種別承格一覽表……………三三九

天仁乎波(第二八三節)ナトト……………三四六

をこにこの別(第二九六節)……………三六一

にこへこの別(第三〇三節)……………三七四

ごてものごもご通常のごも(第三一七節)……………三八七

はしといふ辭……………三九四

ねはずばせば(第三三一節以下)……………三九八より

天仁乎波のて助動詞のて差別(第三四一節)……………四〇五

かし(第三四五節)……………四一〇

聲音(第三六〇節)……………四二四  
 感歎(第三六一節)あはれあはれの類……………四二五より  
 諷詠(第三九四節)……………四五五  
 誘導(第三九六節)いさいでる類……………四五七より  
 呼應(第四〇〇節)あいないの類……………四六三より  
 添附(第四一〇節)……………四七五  
 係辭(第四二〇節)……………四八一  
 係辭のぞ(第四二二節)……………四八三  
 (一)結辭を含むもの(二)結辭より下に續くもの(三)結辭を活用して下に續くもの(四)もぞ(二種)あもぞさぞ……………四八九より  
 係辭のか(第四二八節)……………四九二  
 (一)結辭より直に下に續くるもの(二)結辭を活用して下についくるもの……………四九三より

反語のか(第四三四節)……………四九五  
 係辭のや(第四三八節)……………四九七  
 (一)やといひ止めて結辭を含むもの(二)體言に止めて結辭を含むもの(三)言掛にて結辭を含むもの……………四九八より  
 れや二種(第四四五節)……………五〇二  
 第十二表れや一覽表(第四四六節)……………五〇三  
 反語のや(第四四七節)……………五〇五  
 なん(第四五三節)……………五〇八  
 (一)なんといひ止めて結辭を含むもの(二)なんの下に結辭を含むもの(三)結辭より直に下についくるもの(四)結辭を活用して下についくるもの……………百一〇より  
 何(第四六〇節)……………五二二  
 係辭の何(第四六三節)……………五二四  
 (一)體言に止めて結辭を含むもの(二)言ひさして結辭を含むもの(三)結辭より直に下についくるもの(四)名詞又は副詞となりて結辭を要せざるもの……………五二一より

反語の何(第四七一節).....五二七

問掛の何(第四七三節).....五二九

こそ(第四七五節).....五三二

(一)體言に止めて結辭を含むもの(二)言ひさして結辭を含むもの(三)結辭より直に下につくもの(四)結辭を活用して下に續くるもの.....五三三より

助動詞「五」のる形容詞のさるき等にて結ぶもの.....五三六より

もこそ(二種)あもこそ、さこそ(二類).....五四〇より

含蓄 第四八七節.....五四四

詞の玉の緒に變格といはれしもの.....五四五

(第一類)係辭なくして四階にて受くるもの.....五四六

(第四八八節三種の別).....五四六

(第二類)係辭の下結辭なきもの(第四九二節).....五五五

(第三類)係辭の有無を通じて言ひさして止めたるもの(第四九五節).....五五九

(第四類)係辭の有無を通じて體言にて止めたるもの(第四九六節).....五六一

附録.....五六一

枕詞(第四九七節).....五六二

言掛(第四九八節).....五六五

倒置(第四九九節).....五六七

挿入(第五〇〇節).....五六九

應用法(第五〇一節).....五七二

注記の符號.....五七三

注記の例、歌(第五〇三節).....五七四

同文(第五〇四節)……………五七六  
 倒置注記の例……………五八一  
 單插複挿注記の例……………五八二

皇國文法釋義目錄終

皇國文法釋義

中邨秋香著

總論

◎總論

第一節

我が國の文法は入り難きが如くにして、得易きものなり、さるは其末に就きてこれを見れば、錯雜煩碎にして、ほゞ要領を得難きが如き感なきにあらざるも、其本を究むれば、規則整然として、條理分明に、一切の活用皆此條規に本づき、毫釐も差ふ所なきものなればなり、故に古來此道に入る者、己に其七分を修め得るに至れば、係結かひりむすびをはじめ、尋常普通の文法に於ては、大概之を誤ることなかりき、さるに今の學生を見るに、中學を卒業せし者といへども、係

總論

結を始め普通の文法大かた之を誤らざる者なきは、是れ一は其學科の多くして、力をこれに專にするを得ざるに本づくものなるべしといへども、又教授法の猶その宜しきを得ざるに依るもの多かるべし、

そもく今の我國文法書は、足代弘訓、妙立寺義門、富樫廣蔭、權田直助諸先達の如き、本居派語學家の説に、鶴峯戊申氏の頃より起れる西洋文法折衷説の混和したるが、輾轉して成る所のものなり、西洋文法固より忌むべきにあらず、忌むべからざるのみならず、西洋文法をも駢修する今日に於ては、相類せんこと、もこより望ましき事なりといへども、いかにせん、西洋文法と我國の文法とは、元來同じからざるものなれば、強てこれに依るときは、遂に我が文法を誤るのみならず、隨てかの整然た

第二節  
西洋文法

る規則、分明なる條理をも亂るに至る、今の我が國文法中には、おのづから此弊を免れざるものあり、

今其一例を示さば、急ぎて行く、戰ひて勝つ、など動詞の連用に、ての添ひて動詞に連る時は、急ぎて、戰ひては性質變じて副詞となすと言ひ、又高く飛ぶ、烈しく戰ふなど形容詞の連用より、動詞に連る時は、高く、烈しくは、性質變じて副詞となすと言ふが如き、是れ全く西洋文法より來りし説にて、我國の文法には決してなき事なり、急ぎて、戰ひて、のては、てつづるつれてよと活く助動詞、(本書動詞の初に掲ぐる用言圖五〇)にして、急ぎて、戰ひて、のては即ち其の二階連用なり、又高く飛ぶ、烈しく戰ふの、くと言ひ、しくといふは、しくさけれ用言圖三七の活しくしきしけれ用言圖三八しくの活と活く形容詞にして高く、烈しくは即ちその二階連用なり

又さのふ(昨日)けふ(今日)いま(今)むかし(昔)の類を名詞と副詞とに分ち、雪と消ゆ、山と高し、又は水は脚手に流るなぞいふ、雪と山と脚手にの類を副詞とするが如きも、西洋文法より來りし説にて、我が國の文法にては、これらもとよりいづれも名詞にして雪と山と脚手にの如きは、名詞と。又はにの天仁平波にて受けたるものなり、尙ほこれらの事は、副詞の



部(第六〇節第六五節)に委しくいへり。

おほよそ我が文法は西洋文法の如く、其續に依り性質變ずる等の事なく、形容詞はいつくにも形容詞、助動詞はいつくにも助動詞にして、副詞は名詞にあらず、活語にもあらず、一種の體言をいふもの、連續に依り、形容詞、助動詞等より變じて成るなどいふものにはあらず、規則まことに正しくして、條理明かなるものなり、ざるを西洋文法をもて之に加ふるにより、用言にして時に副詞と變ずるものあり、副詞にして時に用言となるが如きものありて、條規もよく紛亂し、初學の如きは殊に其錯雜に困むに至る、

今の文法書中、接續詞、接頭辭等を分つものあれど、我が國の文法にては之を要せず、その接續詞といへる類は副詞として差支なく、又接頭辭といへるは名詞、又は副詞に入るべきものなれば今はこれらの分類は立てず、

第三節  
係結

従前我が國の文法に於ては、係結をもて最重要の事となせり、さるに西洋文法折衷の説起りてより、係結の事漸く疎略となり、殊に何の係辭の如きは、すべて之を副詞と稱し、副辭と係辭との區別を論ぜざるが如き、是亦學生を謬る一原因なり、故に本書に於ては特に係辭の部を設く、

従前係辭と稱するもの、中、三階のものは徒四階の如きは係辭とすべきものにあらず、又四階の係辭中かを加ふべき事等は、係辭の部(四二〇節)に於て委しく論せり、

助動詞は階級、性質、係結、時、等の作用、一に動詞と同じく、唯其種類に依りて、受辭を別にする點のみ異なるものなれば、固より心得易きものなり、さるに學生往々之を學ぶを難んずるものは、畢竟今の教授法其要領を得ざるに依らずば、蓋し助動詞の事は諸家圖をもて示せるものいと多きが中に、妙立寺

義門師の天爾遠波友鏡及び向陽軒正音師の新鏡の兩圖、最も簡明にして、能く肯綮を得たり、故に今は之に基き、尙ほ其及ばざる所、足らざる所を補正す、本書動詞の初に掲ぐる用言圖中の助動詞圖是れなり、

階級とは用言圖に掲ぐる、一階より六階までの各階を言ひ、性質とは、同圖將然より希求までの六を言ひ、係結とは、同圖中、係結として掲ぐる四階のぞかやなん何、五階のこそにかゝる結辭を言ひ、時とは同圖に掲ぐる一階の未來、三階の現在、五階の過去を言ふ、向陽軒正音師は義門師の門に出でし人にて、因幡の産、余が從ひて委しく義門師の説を聞きし人なり、

今の文法書中、圖を示せるもの、大慨動詞、形容詞、助動詞等各種に於て其圖を別にす、然れどもこれら其階級、性質より、係結、及び時等、總て全く同一の作用をなすものなれば、本書用言圖に於ては一貫して之を示せり、是其整然たる規則、分明なる條理

第五節

助辭接尾語

を見るに於て、最も緊切なるものなればなり、  
 すべて助辭及び接尾語は、其受くる所に依りて、おのづから其旨意を異にするものなれば、受くる所の体用の別、又用言に在りては其階級を明かにする事最必要なり、是本書これらの説明に於て、最も丁寧に之を示す所以なり、

例へばやの辭の如き、主や誰れ、小瓶やいづら、又ははるけさやなど、ひれふるや誰れ、の類のやを問掛なりといふ説もあれど、問掛のやは名詞を受けず、又用言にては三階に限りて之をうけ、其他を受けざる例なれば、右の主、小瓶なといふ名詞、并にはるけさ、ひれふるなどいふ用言四階をうくるものは感歎のやにして、問掛にはあらずることの知らるゝが如し、

第六節

自他活用

自他活用の事は、詞の通路を始として、石橋眞國氏の金石問答、筆のすさび、長野義言氏の活語初の葉、横山由清氏の活語自他捷覽の類に至るまで、諸家の著書枚舉すべくもあらねど、何れ

も各種の言語につきて、一々其典例を擧げしに過ぎずして、未だ其原則を説き示せるものならず、そもく各種典例の依る所、主として其原則に在るものなれば、先づ其原則を究めんに、は、典例の如きは概して之を知るべきなり、本書動詞中に掲ぐる自動以下六種詞活用表は(第一一五節)即ちその原則なり、我が國の文法上、從來最も解し難しとせしものは、係結に係る變格是なり、然れどもこれは變格と言ふべきものにはあらず、天然の法則上、其結辭を含蓄せしめしにて、これに各々格あること、若くは疑問代名詞、疑問副詞の名詞となるものなること、含蓄の部に言へるが如くなれば、變格と名づくべきにあらずして、條理整然疑ふべきにあらざるものなり、

係結に係る變格とは、詞の玉の結二の卷に修むる變格の事にして、係辭なくして四階にて

第七節  
係結變格

受け、又は何の係辭ありて三階にて受けたる等、其他規則なるものを稱する名目にて、動詞中の變格にはあらず、

第八節  
文法上須知  
要目

文法上須知の事もより多しといへども、之を要するに、動詞、形容詞、助動詞の作用、并に受辭に連續する法、係辭に對する結法、及び受辭に熟するを以て、最緊要の事とす、故に本書掲ぐる所の用言圖一葉に能く熟するに至らば、此最緊要を擧ぐるを得て、文法上已に其大概に達せりといふを得べし、故に曰く入り難くして得易きものなりと、

受辭とは、用言圖中一階より五階に至るまで各階に就きての受辭をいふ、此受辭は、動詞形容詞、助動詞等に依りて、おのく異なり、動詞、形容詞の受辭は、用言圖中に掲げつ、助動詞の受辭は、切圖に於て一々之を示せり、足代弘訓氏、妙玄寺義門師の如きは、語學を修めんとする者をして、先第一階に受辭を簡師せしめしなり、受辭に熟するの必要なるは、これによりても知るべきなり、

第九節

本書用言に於て、最も細かに其作用を説き、又動詞形容詞に於て、受辭に連續する例、并に係辭に對する結辭の例を一々委しく示すものは、畢竟用言圖に熟せしめんが爲めなり、

第一〇節

◎文字

◎文字

本邦の文字に二種あり、一を象形文字といひ、一を音標文字といふ、

象形文字

象形文字とは、文字もて事物を形状するものにて、一字の内一語の意義を有するをいふ、即ち天地、日月、起居、進退の字の如し、此象形文字は、多くは支那字に取るものにして、支那に取るものには、音訓兩義あり、

音

音とは天地をテンチ、日月をジツゲツといふが如し、こはもと支那音中、漢、吳の二音より來たるものなり、漢音、吳音の別は、例へば日月の音、漢にてはジツゲツ、吳にてニチゲツツなるが如し、漢音とは、支那北方の音、吳音とは、南方の音なり、猶本邦の四國九州と、吳羽と言語同じからざるが如く、殊に支那は版圖廣大なれば、南北に依り音を異にするは勢の免れざる所なり、又此外に唐音と稱するものあり、日月をジツエツといふが如し、こは後世變轉せる支那音を傳へしものにて、此三音を稱して漢字三音といふ、

文字

漢字三音

元來支那國語は音韻に依るものなれば、此音韻によりて、直ちに事物の何たるを識別し、又同字にても音によりて義を異にす、例へば積の字積み聚むなせ、用よりいふ時は、音セキにして蓄積しあるものの、名稱にいふ時は音シ、また出の字いつといふ自動よりいふ時は、音シツにして、いだすと他動よりいふ時は、音スキなり、又辟の字、后辟、微辟、便辟、辟易などは音ヘキ、回辟、逃辟なせ避くる義なる時には、音ヒなるが如し、これら支那にては、其音によりて其義分るゝ事なれば、音韻は甚だ必要のものなれど、本邦にては音によりて直ちに義を知り得べきにわらず、是其必ず訓を要する所以なり、

訓

訓とは本邦固有の言語を、支那字にわてはめたるものにて、例へば天の字にアメアマの語、又場合によりては、ソラタカシなせいふ語をもわて、地にツチの語、又はクニトコロなせいふ語をも當つる類、これら皆本邦語をもて、支那字其性質なるものにあてたるものなり、故に訓と稱するものは、悉皆本邦固有の言語と知るべきなり、

支那字を本邦にて學びし初にありては、當時固より今いふ字畫の如きものもなく、一字毎に音訓併せて同時に學びしなり、例へば千字文の「天地玄黄」の如き、テンチノアメツチハゲンクワットクロクキイロナリ」と誦讀せし類にて、これより字音漸く本邦語に混化し、

今日に至りては、字音語にして本邦語となれるものも多く、即ち天地、日月の如き連稱名詞の類はアメツチツキヒといふよりは、テンチジツゲツといふかた、一般普通に用ひらるゝに至れり、

又唐音よりして本邦語となれるものも少からず、アンロフアンキフン行燈、アンキフン行脚、カンキフン看經の類なり、此漢、吳、唐の三音、本邦に傳はるものは、其本國の原音と同一ならず、一二を例せば、俱は、舉朱反にて、音キユなるを、グといひ、纒は、力主反音リユなるを、ルと呼び、風は、方戎反音ヒユウなるを、フウと呼び、律は、呂郵反、又力出反ともリユツなるを、リツと呼び、聿は、以出反、音イユツなるを、イツといへるの類なり、これら拗音なるはすべて正音とせしは、畢竟風土異なり、而も當時の音聲に適せざりし等より、自然一種の音を成せりしなり、

漢字にして今日日本邦の文字となり、日常普通の用に供せらるゝもの、字數は、凡そ四千に下らざるべしといへり、但し漢學専門の上に於て用ひらるゝもの、如きは、固より此限にわらず

第二節 國字

又象形文字に國字あり、一にこれを和字ともいふは、漢字に對する名稱なり、こは本邦にて造れるものなれば音なし、

國字は本邦にて造れるものなれども、其由る所は多く漢字の義に取れるものなり、例へば、  
 風 コガラシ 風木を吹く義 風 ナグ 風止む義 峠 タウゲ 山の頂上の義  
 杣 シンマ 木山にある義 榊 サカキ 神祭に用ふる木 榎 カシ 堅き木  
 右の外

絶 モミヂ 色ある木の義 糶 カウヂ 米に花さく義 唫 シカト 耳に定めて聞く義  
 舩 セガレ 身を分つ義 衛 チドリ 飛び行く鳥の義 鳴 シギ 田に居る鳥の義  
 佛 オモカゲ これら漢字の義に取りて造りしもの、一斑を見るべし、又造意の儘ならざるものあり、  
 笹 ツ、 梶 スギ 或は楓の誤とも云 榴 コマヒ  
 裨 チハヤ 適 アツバレ 鮑 アハビ 鯨 ドチャウ

此類説をなさばいかにも言ひなすべけれど、打任せては由る所明かならざるものなり、

又國字中、漢字と形同じくして、義異なるものあり、

これを新井白石翁は國訓と名稱せられしかど、猶ほ國字といふべきなり、何となれば漢字

に依るに非ずして、字義により本邦にて造りしものなればなり、例へば、

噓 サツ 口に音なく心に察する義 咄 ハナシ 口より言を出す義 澳 オキ 水の奥の義  
 扱 サテ 又手の合 楨 マキ 真木の合 椿 ツバキ 春木の合  
 雫 シツク 雨下るの義 霞 カスミ 雨氣段をなす義 鏡 カナマリ 金椀の義  
 鎬 シノギ 刀背高さの義 柶 ヒラギ 冬木の合

又老若の若弁當の弁意虎の竜の類は漢字の通音よりするものにて、國字といふにはあらず、また轄を雀、雁を尸と書くは省文なり、混すべからず、

國字の数は今日に存するもの、凡そ二百に過ぎずといへり、漢字に比すれば、實に僅少のものなり、

第二節 音標文字

音標文字とは、文字もて音聲を標示するものにて、其字には何等の意義なきものなり、假名即ち是なり、これに片假名、平假名の二體あり、共に本邦にて造れるものなり、

本邦上世文字の有無は諸説區々なれども、確證なければ、今は論せず、漢文渡來の後、それに

依りて事を記し、方法二あり、一は漢文に倣ひて記せるものにて、日本書紀の如き是なり、一は漢字を借りて我が言語を綴れるものにて、古事記の如き是れなり、漢字を借りて言語を綴れる法、漸次に進みて萬葉假名の如きものとなり、平安朝に至るに及び、更に熟して片假名、平假名起り、又此言語の綴り方漸次進むに伴ひて、漢文訓讀の口調漸く國文と融和し、更に平安朝の文となるに至れるなり。

第三節

○片假名

片假名は何人の作に出づるを知らず、これを片假名と稱するは、漢字の片旁を取るものなればなり、

片假名は吉備真備の作に成るといふ説あれども確證なし、思ふに最初は真假名の省略字に起り、種々の體ありしが、後漸次に一に歸せしものにて、固より一人二人の手に成りしなといふものにはあらざるべし、そは古き書蹟中種々の體あるをもて知るべきなり、

片假名といふ名稱は漢字の偏旁を取りて作れるものなれば、旁假名の義なり、片假名にあらず、といふ説もあれど、これら畢竟漢字につきて言へばこそなる論も生ずるなれ、カタといふ語より言はゞ一片といふも、偏旁といふも、終に同一旨に歸すべきをや、又一説傍假名

假名名義

の意にて、漢字のかたはらに傍訓するより起る名といひ、又一説には草假名の和かなるに對して堅假名なりなど云ふが如きは、論にも足らざる説といふべし、

假名はもと假名にて、漢字の音を假りて語言をあらはす字の義、名は字をいふ、故に假字とも書けるなり、さて此カリナを音便にカ<sup>ナ</sup>と稱へ、更に略かりてカ<sup>ナ</sup>ともいへるなり、されば假名といへば漢字の音を假るものといふ名なりしを、片假名、平假名の稱起るに及びて、これと別たんが爲に、更に真假名、又は真名等の稱は生ぜしなり、

大和假名

片假名、一に大和假名といふ、大和は日本の義、漢字に對する稱なりといへり、或説に出雲假名の名に對し、大和に起るものなればいふといへるは信じがたし、

片假名原字

片假名の現今普通に行はるゝもの、其數都て四十七あり、今いは歌もてこれを左に記し、併せてその原字を示すべし、

イ	伊の省文	ロ	呂の省文	ハ	半の省文	ニ	仁の省文	ホ	保の省文
ヘ	反の省文	ト	止の省文	ナ	千の全體	リ	利の省文	ヌ	奴の省文
ル	流の省文	ナ	乎の省文	ワ	和の省文	カ	加の省文	ミ	與の省文
文	字								

依りて事を記し、方法二あり、一は漢文に倣ひて記せるものにて、日本書紀の如き是なり、一は漢字を借りて我が言語を綴れるものにて、古事記の如き是れなり、漢字を借りて言語を綴れる法、漸次に進みて萬葉假名の如きものとなり、平安朝に至るに及び、更に熟して片假名、平假名起り、又此言語の綴り方漸次進むに伴ひて、漢文訓讀の口調漸く國文と融和し、更に平安朝の文となるに至れるなり、

第三節

○片假名

片假名は何人の作に出づるを知らず、これを片假名と稱するは、漢字の片旁を取るものなればなり、

片假名は吉備真備の作に成るといふ説あれども確證なし、思ふに最初は真假名の省略字に起り、種々の體ありしが、後漸次に一に歸せしものにて、固より一人二人の手に成りしなむといふものにはあらずるべし、そは古き書蹟中種々の體あるをもて知るべきなり、

片假名といふ名稱は、漢字の偏旁を取りて作れるものなれば、旁假名の義なり、片假名にあらず、といふ説もあれど、これら畢竟漢字につきて言へばこそなる論も生ずるなれ、カタといふ語より言はゞ一片といふも、偏旁といふも、終に同一旨に歸すべきをや、又一説傍假名

片假名作者

片假名

假名名義

大和假名

片假名原字

の意にて、漢字のかたはらに傍訓するより起る名といひ、又一説には草假名の和かなるに對して堅假名なりなど云ふが如きは、論にも足らざる説といふべし、

假名はもと假名にて、漢字の音を假りて語言をあらはす字の義、名は字をいふ、故に假字とも書けるなり、さて此カリナを音便にカンナと稱へ、更に略かりてカナともいへるなり、されば假名といへば漢字の音を假るものをいふ名なりしを、片假名、平假名の稱起るに及びて、これと別たんが爲に、更に真假名、又は真名等の稱は生ぜしなり、

片假名、一は大和假名といふ、大和は日本の義、漢字に對する稱なりといへり、或説に出雲假名の名に對し、大和に起るものなればいふといへるは信じがたし、

片假名の現今普通に行はるゝもの、其數都て四十七あり、今いろは歌もてこれを左に記し、併せてその原字を示すべし、

イ	伊の省文	ロ	呂の省文	ハ	半の省文	ニ	仁の省文	ホ	保の省文
ヘ	反の省文	ト	止の省文	ナ	千の全體	リ	利の省文	ヌ	奴の省文
ル	流の省文	ナ	平の省文	ワ	和の省文	カ	加の省文	ミ	與の省文
文	字								



文字

タ 多の省文

レ 礼の省文、礼は禮の古字

ソ 曾の省文

十八

ツ 川の草

ネ 彌の省文、音又子とも書く、  
子は子の全體訓

ナ 奈の省文

ラ 良の省文

ム 牟の省文

ウ 宇の省文

井 井の省文、音又井とも書く  
井の全體訓

ノ 乃の省文

オ 於の省文、於は於の俗字

ク 久の省文

ヤ 也の省文

マ 末の省文

ケ 介の省文

フ 不の省文

コ 己の省文

エ 江の省文

テ 天の省文

ア 阿の省文

サ 草の省文

キ 幾の省文

ユ 弓の省文

メ 女の省文

ミ 三の草

シ 之の草

エ 慧の略字、慧の省文

ユ 訓

メ 訓

モ 毛の省文

セ 世の省文

ス 須の省文

ヒ 比の省文

いろは歌作者

原字につきては諸説多けれど、今は其内平穩なる説に依りて示せり、

いろは歌作者は、古來弘法大師といひ、又は大師と、大安寺の護命僧正との合作といひ、或は大師と勤操、最勝と三人の作といひ、又は最證一人の作といひ諸説紛々たりといへども、何れも確證なし、涅槃經の諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、の四句の偈に本づきて、七

片假名

ンツ

合字

五をもて一句とし、第二は六五、前二句に小乗の意を述べ、後の二句に大乘の旨を示し、又一首を七字句の六句と、五字句の一句とし、句の尾にトガナクテシヌといふ偈語をふみたるものなり、

此外に鼻音にン 悉曇空点のニより出でたりとも、 促音に、ツ 悉曇滅點...より出でたりとも、 又ニより誤りともいふ、合字に「コトキトモ」あり、

ンハニの字の下を撥ねたるものなりといふ説もあり、今は普通の説に依る、

又シテニンを用ふるものあり、爲の省文なり、トキに寸を用ふるものあり、時の省文なり、

第一四節

平假名

平假名作者

○平假名

平假名の作者亦詳かならず、これを平假名といふは、平は簡畧容易の意なり、

平假名の作者は、いろは歌と同じく、空海なるべしと古來言ひ來れど、徵證なし、眞假名を草書に書きたるが、漸次にくづれたるものにて、固より何人の製作に成るものなぞいふべきに非ず、いつとなく、自然に一體を成し、こゝ片假名に同じ、といふ説然るべきが如し、

文字

十九

平假名、一に出雲假名といひ、又草假名、女手ともいへり、出雲假名の名稱は、空海出雲に在りて作れりといふ傳説より云ふといへり、草假名は草書體の假名の義、女手の手は、字といふ意にて、即ち女文字の義なり、

出雲假名  
草假名

平假名の普通に行はるゝものゝ數も、亦四十七、鼻音を加へて

女手  
平假名原字

い	以の草略、又は伊の草ともいふ、	ろ	呂の草	は	波の草	に	仁の草		
ほ	保の草	へ	反の省文章	こ	止の草	ち	知の草	り	利の草
ぬ	奴の草	る	留の草	を	遠の草	わ	和の草	か	加の草
よ	與の省文との草	た	太の草	れ	礼の草	そ	曾の草	つ	川の草
ね	禰の草	な	奈の草	ら	良の草	む	武の草	う	宇の草略
る	爲の草	の	乃の草	お	於の草	く	久の草	や	也の草
ま	末の草	け	計の草	ふ	不の草	こ	己の草	ね	江の草

平假名  
合字

符號字

平假名別體

て	天の草	あ	安の草	さ	左の草	き	幾の草	ゆ	由の草
め	女の草	み	美の草	し	之の草	ゑ	惠の草	ひ	比の草
も	毛の草	せ	世の草	す	寸の草				

鼻音ん 悉曇より出でたる片假名のンを、草にんと書きたるなりとも、又无の字にて音なりともいひ、又は二の草の下を撥ねたるなりともいへり、  
促音にはよたれそつねのつを用ひて區別をなさず、されど此つは川の草にはあらで、悉曇滅點の...、或はハの草とも云より出でしものなりといへり、

此外に合字に、とことの場合、よりの合、草字に、之也の草あり、又片假名、平假名ともに符號字あり、ナ、(父)イロ、(色々)カハル、(替々)は、(母)ゆく、(行々)おもひ、(思々)のごとし、これを送字、又は踊字ともいふ、

平假名には別體あり、其大概を左に示すべし、

文 字	以	耳	千	乎	禮	奈	字	也	古	起	志	須
路	保	里	王	會	那	井	井	滿	衣	支	惠	
者	本	怒	可	楚	郎	乃	乃	万	天	由	飛	
八	通	留	與	徒	良	能	能	介	阿	免	毛	
盤	止	流	多	津	無	於	於	希	左	美	世	
爾	知	越	連	福	年	久	久	婦	佐	三	春	

濁音、半濁音等の事は五十音の下(第一七節)に於て示すべし。

第五節

○五十音

五十音は何人の作に成るものか、詳かならず、

或は上古より傳はりしものにて、萬葉集に「言靈の幸はふ國、また言靈の助くる國」といふ  
 たるも、畢竟此五十連音の千變萬化して、靈妙不測の活動を有するを稱せる言なり、といひ、  
 或は吉備眞備が作なりといひ、又は眞言僧が本邦固有の音に本づき悉曇に因りて作れる  
 なり、など云へど何れも確證なし。

父母子三音

我國の言語は、五十音より成立ち、五十音は父母子の三音より  
 成立ち、父母子三音は原音發動聲より發生す、

原音發動聲

原音發動聲とは音聲ありといへども、未だこれを名狀すべか  
 らざるものを云ふ、

原音發動聲

最れ肺腑より咽喉に向ひて出づる音聲をいふ、其聲幽微にして名狀し難しといへども、假

にこれを言はゞ、人の呻吟する時發するものゝ如き、是なり、此音聲喉に至り初めてうとな

母音

母音

母音とはあいうえおの五音をいふ、

原音喉に出でうとなり、喉より上牙に向ひてゐとなり、舌根に向ひてい、舌上に向ひてえ、  
下齶に向ひておとなり、即ち母音成る、但し母音發生の説古來諸説紛々として一定せず、  
れを自ら呼び試ればおのづから明かなり、母音は純正單一の音にして、あ、い、う、の  
如く長く聲を引きて之をいふも、他音を生せず、故にこれを單音ともいふ、母音の名稱は梵  
語摩多の譯に出づるものなり、

父音

父音

父音とはくすつぬふむゆるうの九音をいふ、

原音喉に出でうとなり、母音となると同時に父音あり、即ち原音上牙に觸れて(ク)下齶に  
觸れて(ヌ)舌根に觸れて(ツ)舌上に觸れて(エ)唇内に觸れて(フ)唇に觸れて(ム)上牙より逆

原音初聲

に喉に向ひて(エ)舌頭に觸れて(ル)下齶より逆に喉に向ひて(ク)となる、これを空音とす、空  
音には未だ聲あらず、此空音、母音のうと和して初めてくすつぬふむゆるうの音を生ず、  
之を父音といふ、父音發して聲となると同時に、母音と和して、三十六子音を生ず、父音の名  
稱は、母音に對していへるもの、又空音は梵に滄樂音といへりといふ、

子音

子音

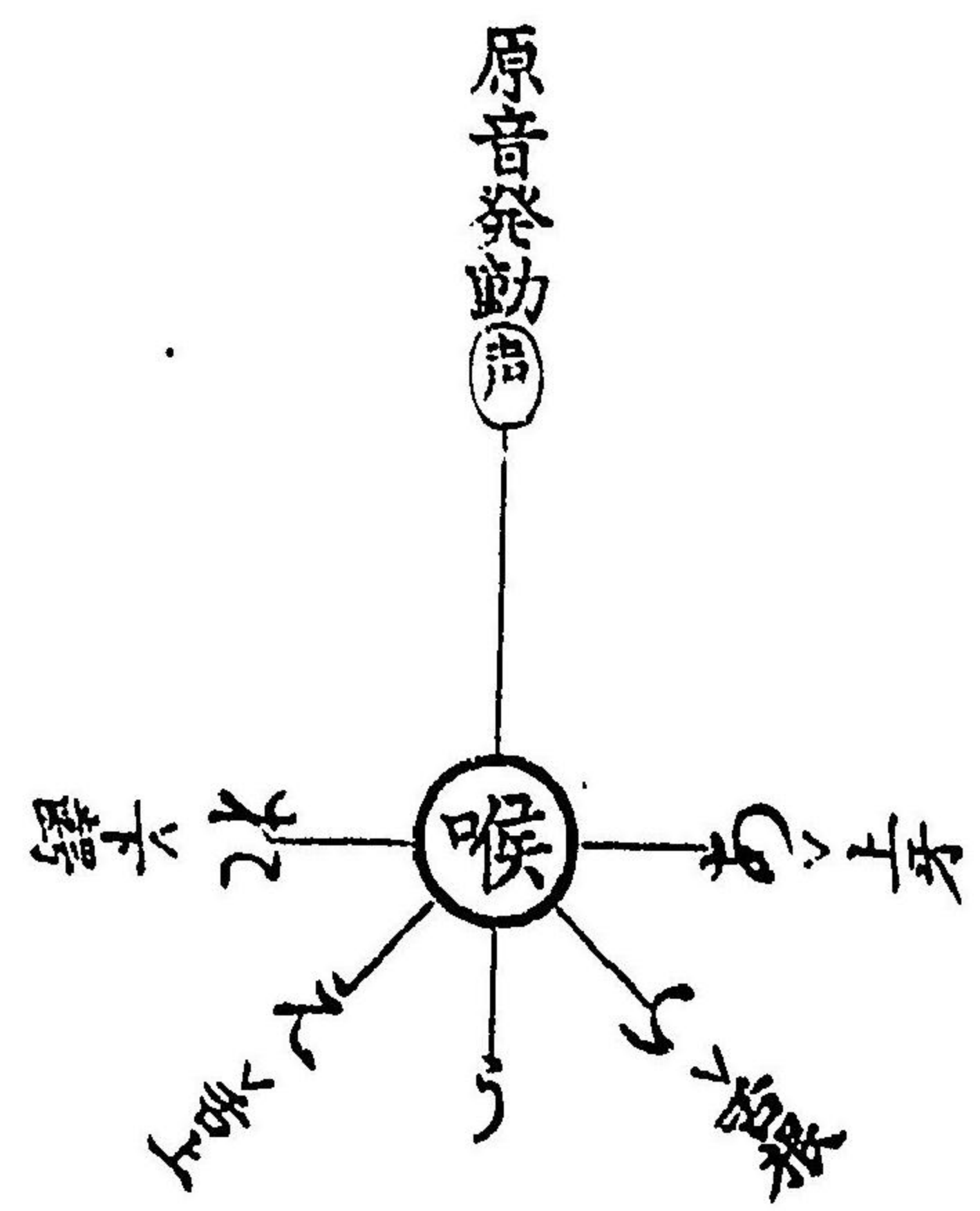
子音とは母音のあいうえおの五音、父音のクヌツマムムユル  
うの九音を除きたる三十六音をいふ、

此三十六音は父音のくすつぬふむゆるうの九音、母音のあいうえおの四音と配合して初  
めて生ずるものなり、

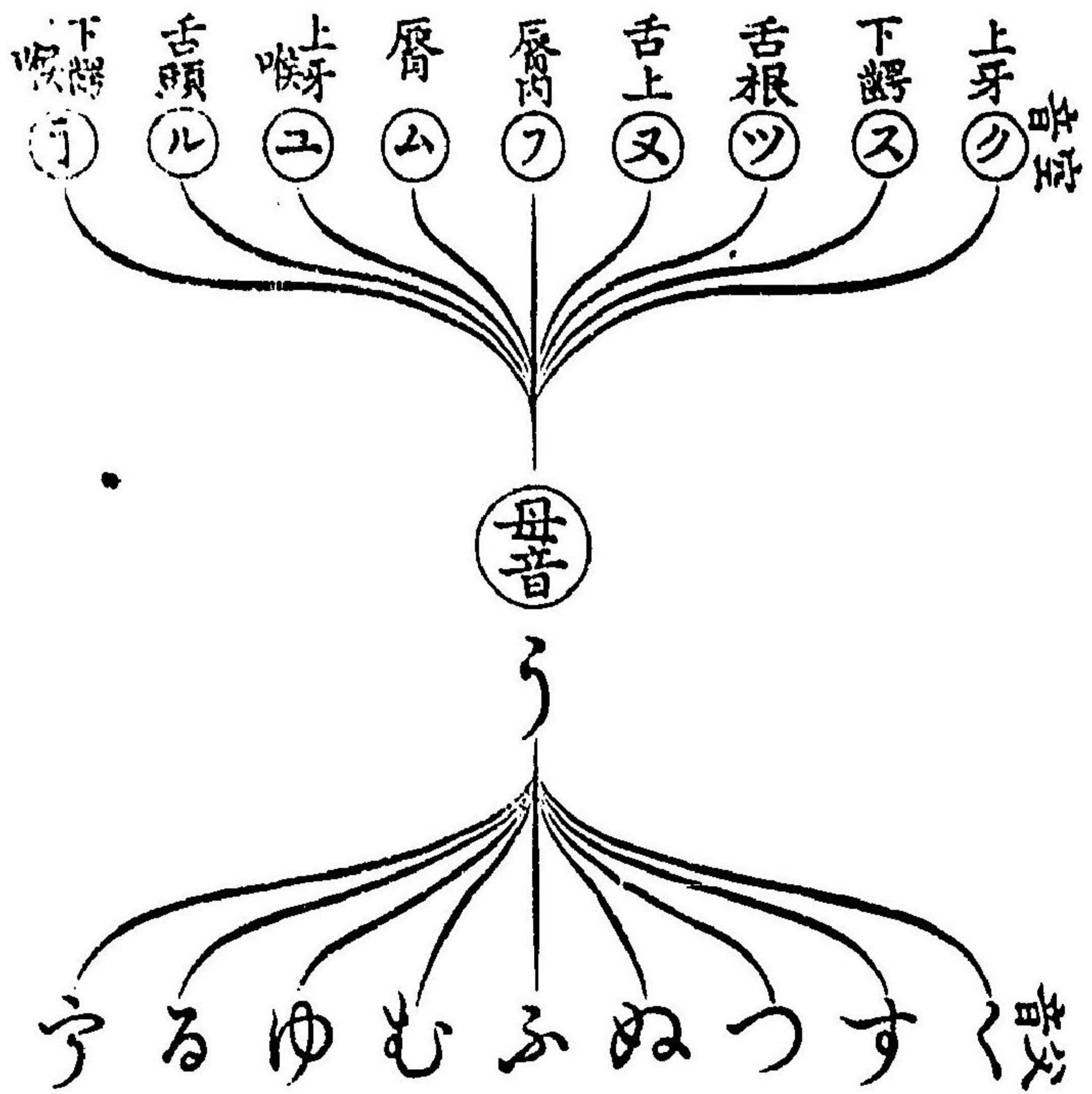
父音と子音とは、音尾に必ずあいうえおの韻をあらはす、即ちカーアキーイキウけ  
ーエーオの如し、さればこれを複音ともいふ、

原音發動聲より母音を生じ、空音、母音のうと和して、父音を生  
じ、父音、母音と和して子音を生ずる圖左の如し、

文字  
原音母音を生ずる圖

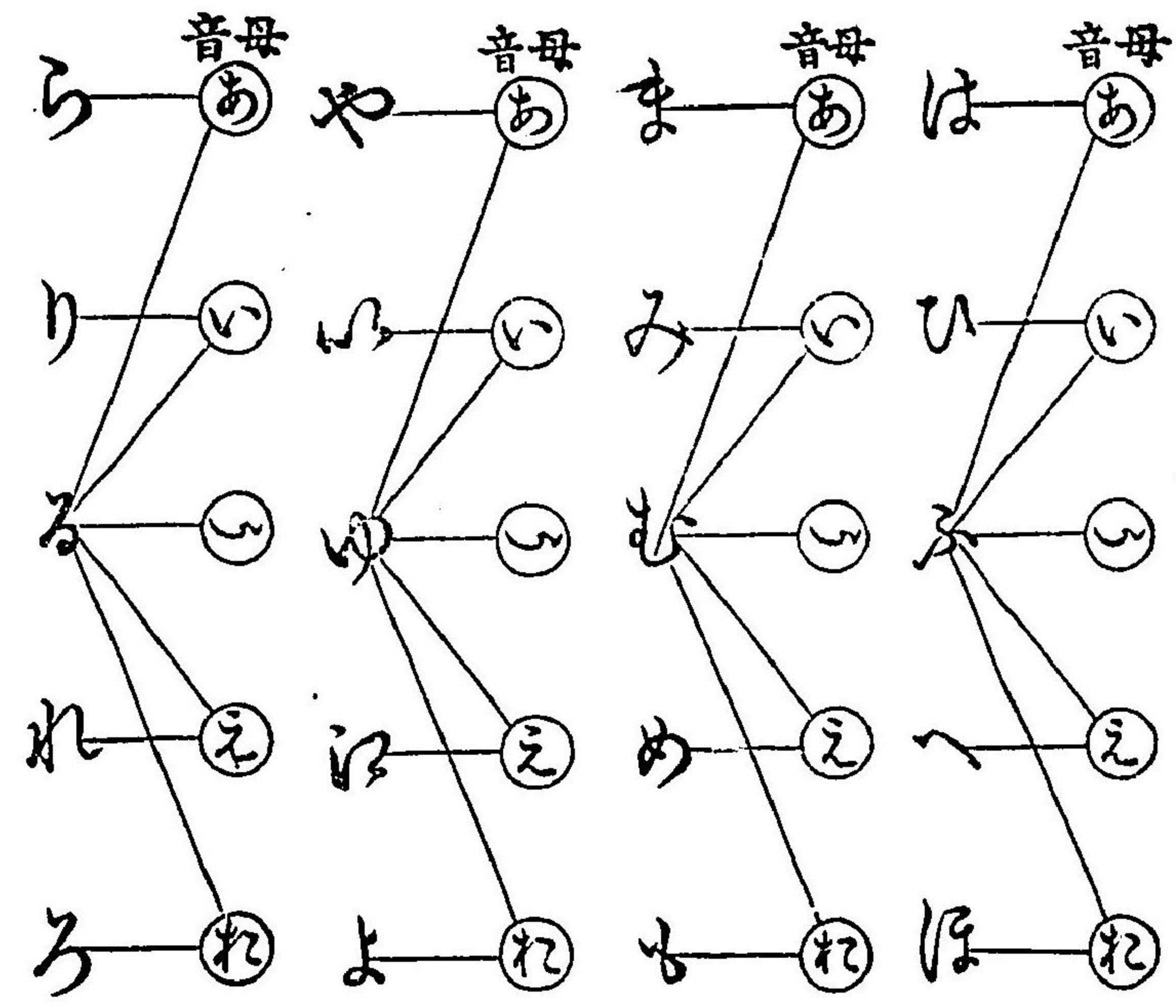


空音母音のうと和して父音を生ずる圖



文字

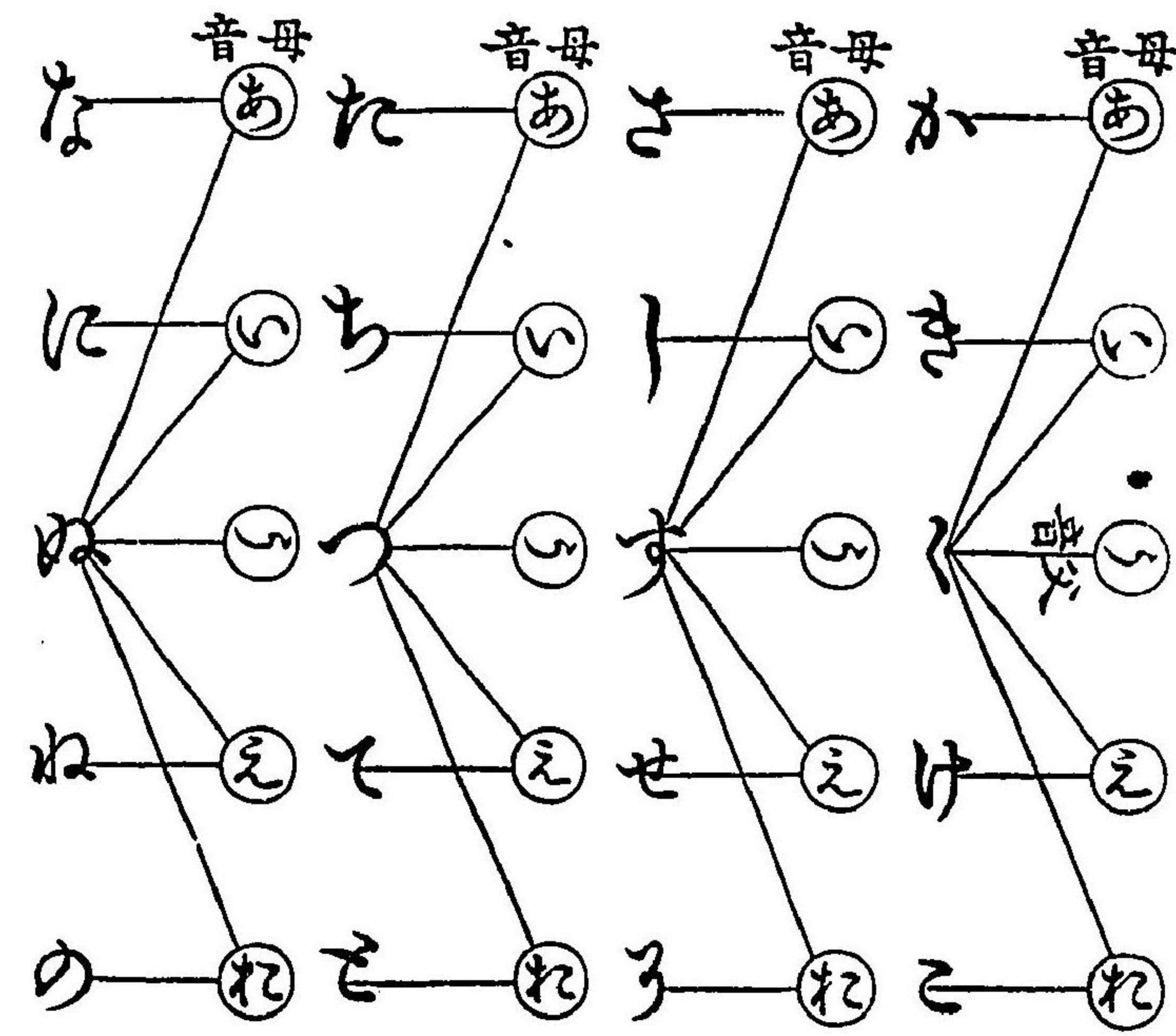
文字



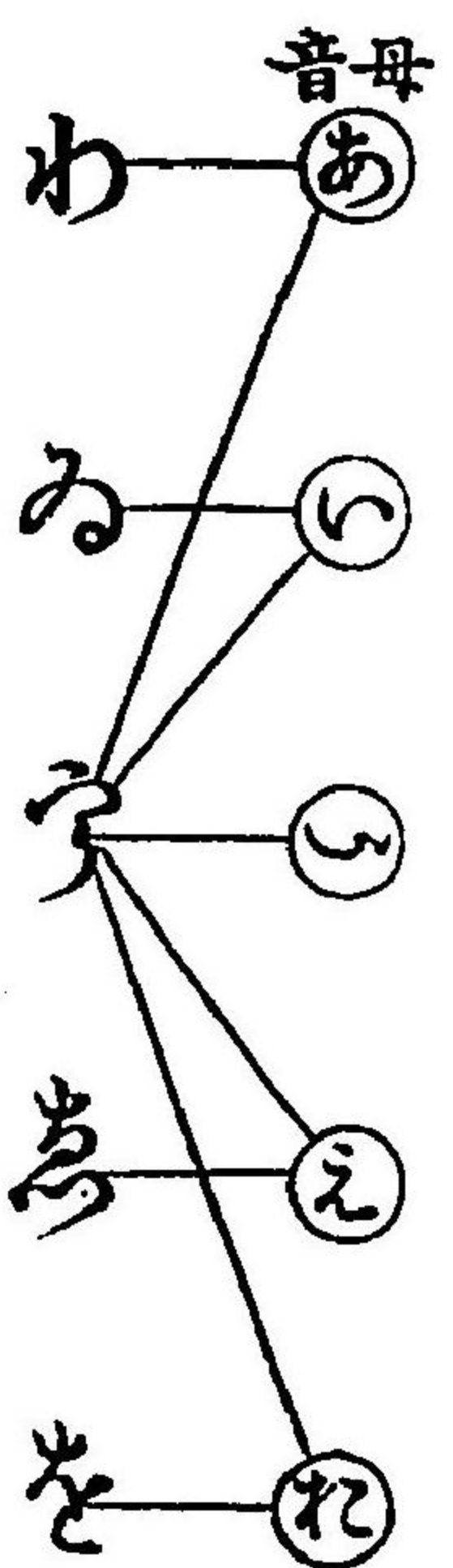
二十九

文字

父音、母音と和して子音を生ずる圖



二十八



父音のくど母音のわと接しあ合してかを生じ、父音のく、母音のいと接しあ合してきを生じ、くどえと合してはくけ、くどおと合してはくこを生ず、さ行以下皆これに准して知るべし、尙此反切の事は延約の條下(第二〇節)にさへり。

以上示すが如く、原音發動聲より母音を生じ、これと同時に空音と母音のうと相和して父音を生じ、父音母音相和して子音を生じ、初めて五十連音成る。

第一六節

五十連音圖

喉	平假名	片假名	音									
あ	い	う	え	お	ア	イ	ウ	エ	オ	ア	あ	行

齒	喉	舌	喉	唇	唇	舌	舌	齶	牙
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	
ゑ	れ	い	め	へ	ね	て	せ	け	
を	ろ	よ	も	ほ	の	こ	そ	こ	
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	
ヰ	リ	ヱ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	
ヱ	レ	ヱ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	行





七十五音

第一八節

鼻音促音

鼻音 促音

いふ、又半濁音の事を次清音、又は「はじき音」ともいふ、古來七十五音と稱せしものは、此濁音、半濁音の二十五字を、五十音に合せしものなり、

此外に尙ほ鼻音、促音の二聲あり、鼻音とは「ん」片假名にては「ん」をいひ、促音とは「づ」片假名にては「づ」をいふ、此二音はいづれも單獨に出づる聲音にはあらず、他音の下に連りて、發するものなり、例へば、「んは」「はこんぞ」「殆」「いつくんぞ」「焉」の類、つは「もつばら」「専」「かへつて」「却」の類なり、

「はこんぞ」「はとほと」「いつくんぞ」「いつくにぞ」の音便なり、これらの類いと多し、又「かんとん」「閑散」「でんしん」「電信」など、性來の字音よりするものも多し、

ん」といふべし、字音にての區別は、韻鏡、深成所攝の字、即ち韻字の侵覃鹽凡に屬するものは、むにて韻鏡、藥山所攝の字、即ち韻字にて右の侵以下外に渉るものは「ん」と知るべし、

んゐ區別

促音の「もつばら」「は」「はこんぞ」の音便なり、「も」とも「最」の「もつ」とも「と」なり、「またし」「全」の「まづたし」となるに同じ、

んは「う」の音の喉より鼻に發するもの、つは「う」の音の發せんとして發せず、更に喉に復りて促るものなり、

うは前に言へる如く、母音發生の初聲にして、父母音の由て生ずる原音なれば、他の四十九音とは親子本末の關係あり、而して「ん」は實に此より轉ずるものなること、本文示すが如くなれば、四十九音と關係すること亦甚だ親密なり、

促音の標點

促音の「つ」は「た」「行」の「つ」と古來差別なく用ひ來れり、されどこれを標別せざる時は往々紛はしきことあるをもて、今は右肩に標點を施せり、

紛はしとは例へば「かつて」「會て」と「かつて」「勝手」、「まつち」「眞土」と「まつち」「熾」の類なり、本居先生はこれに「ん」を用ひられたれども、「ん」は片假にては「ん」に紛れ易く平假名にては「い」にまがひ易ければ今は標點を施す説に従へり、

第十九節

○拗音

拗音

拗音とは五十音中、あやわの三行を除きたる第二韻より、やゆよの三音に連合し、又第三韻よりは、わゑるの三音に連合して、一音の如く呼ばるゝものをいふ、即ち左の圖の如し、

第一表  
拗音表

第一表

抑音表

		第二韻									也 行	
り	み	ひ			に	ち		ち		き		や
		半濁	濁	清		濁	清	濁	清	濁	清	
りや	みや	びや	びや	ひや	にや	ちや	ちや	ぢや	ぢや	きや	きや	や
りゆ	みゆ	びゆ	びゆ	ひゆ	にゆ	ちゆ	ちゆ	ぢゆ	ぢゆ	きゆ	きゆ	ゆ
りよ	みよ	びよ	びよ	ひよ	によ	ちよ	ちよ	ぢよ	ぢよ	きよ	きよ	よ
		第三韻									和 行	
る	む	ふ			ぬ	つ		す		く		わ
		半濁	濁	清		濁	清	濁	清	濁	清	
るわ	むわ	ぶわ	ぶわ	ふわ	ぬわ	つわ	つわ	ずわ	すわ	くわ	くわ	わ
るゐ	むゐ	ぶゐ	ぶゐ	ふゐ	ぬゐ	つゐ	つゐ	ずゐ	すゐ	くゐ	くゐ	ゐ
るゑ	むゑ	ぶゑ	ぶゑ	ふゑ	ぬゑ	つゑ	つゑ	ずゑ	すゑ	くゑ	くゑ	ゑ

右の内第三韻よりわゐるゑに連合するもの、中くわくるゑすゐの各清濁音およびるゑ等を除き、其他の音は、本邦には甚少し、

又ゆゑといふ拗音は、行より、わ行に連合するものなれば、有るまじき音なれども、遺、唯、維の字の如き、本邦にては吳音として常に呼ばる。

右に掲ぐる所の一斑の例を示さば、

さやくらい(客來)	さゆうとう(舊冬)	きよねん(去年)	きやくしん(逆臣)
もうぎゆう(蒙求)	とうぎよ(統御)	じゆしや(儒者)	しゆぼく(朱墨)
しよもつ(書物)	じやけん(邪見)	じよばつ(序跋)	せんぢや(煎茶)
ちゆうちよ(躊躇)	しふぢやく(執着)	まんなぢゆう(饅頭)	ぢよがく(女學)
らうにやく(老若)	ぎうにゆう(牛乳)	によし(女子)	ひやくしやう(百姓)
ひようたん(氷炭)	びやくだん(白檀)	ひゆうまう(繆妄)	みやくらく(脈絡)
ごびよう(誤謬) <small>誤はひゆうびようの二音あり</small>	りよぐわい(旅外)	はつびやく(八百)	はつくゑ(法華)
さりやく(差略)	へんぐゑ(變化)	くわさう(火急)	
えいぐわ(榮花)			

文字

第二〇節

延約

〇延約

延約とは、一音を延べて二音とし、二音を約めて一音とするものをいふ、一音を延べて二音とするは、例へば日<sup>ひ</sup>ふを日<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>く思<sup>し</sup>ふを思<sup>し</sup>は<sup>は</sup>く、隠<sup>かく</sup>すを隠<sup>かく</sup>さ<sup>さ</sup>ふといふ類なり、

聞くを聞<sup>き</sup>かく申<sup>ま</sup>すを申<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>く言<sup>い</sup>へるを言<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>らく有<sup>あ</sup>らぬを有<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>なく戀<sup>こ</sup>ふるを戀<sup>こ</sup>ふらく笑<sup>わ</sup>みを笑<sup>わ</sup>ま<sup>ま</sup>ひ守<sup>ま</sup>るを守<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ひの類いと多し、

二音を約めて一音とするは、おほ<sup>お</sup>み<sup>み</sup>き<sup>き</sup>大御酒をお<sup>お</sup>み<sup>み</sup>き<sup>き</sup>くれの<sup>の</sup>ある(吳藍)をくれなる、わが<sup>わ</sup>き<sup>き</sup>み<sup>み</sup>(吾君)をわ<sup>わ</sup>き<sup>き</sup>み<sup>み</sup>、こい<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>ふが如し、

なかつ<sup>な</sup>おみ<sup>お</sup>(中臣)をな<sup>な</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>み<sup>み</sup>、わが<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>(吾妹)をわ<sup>わ</sup>き<sup>き</sup>も、はた<sup>は</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>機織<sup>機織</sup>をは<sup>は</sup>と<sup>と</sup>り、わたり<sup>わ</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>(度會)をわ<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>とし<sup>し</sup>へ(年經)をと<sup>と</sup>せ(歳)の類いと多し、

反切

これを反切といふ、これらいつれも天然の法則より、或は延び、或は約まるものにて、人爲をもて漫りに延約すべきにはあらず、

第二節

反切法

〇反切

反切の法は左の如し、

横は本に歸す		縦は末に留る	
甲	乙	丙	
は	あ	か	父
ひ	い	き	母
ふ	う	く	母
へ	え	け	母
ほ	お	こ	母

反切の二音は、上を父とし、下を母とす、父字は縦五文字を上下に通ふのみにて、横に動かさず、母字は横の十字を左右に通ふのみにて、縦に動くことなし、されば同じ段に父字と母字とあるときは、父は横に動くこと能はざれば、母字、父の方に通ひて、父字を約字とす、之を横は本に歸すといふ、又行を異にして父字と母字とあるときは、母は縦に動く事能はず、父字又横に通ふ

を得ざるをもて、父字は縦に母字の位する段に通ひ、母字は横に父字の位する行に通ひて、歸宿するなり、若又同じ行に父字と母字とある時は、父字は母字の方に通ひて歸宿す、これを縦は末に留るといふ、

同じ段に父字と母字とある時とは、即ち甲圖の如く、お段に於ておほの父母字あるが如きものといふ、母字、父の方に通ふとは、ほの字、おの字の方に至りて、おと約まるが如きといふ、大御酒、大御帶の、おみき、おみおびとなる類なり、

行を異にして、父字と母字とある時とは、即ち乙圖の如く、くれのゐる、のゐ、あ行と、な行、とに渡るが如きものをいふ、母は縦に動く能はず、故に父字なるのは縦に母字のある段、即ちなに至り、母字のゐは、横に父字のある行のなに至り、互に接合してなと歸宿する類をいふ、即ちくれのゐる(吳藍)のくれなる(紅)と約まる如し、

同じ行に父字と母字とある時とは、丙圖の如く、わがきみ(吾君)のがきの如きといふ、即ち父字縦に母字の在る所に至りて、きと歸宿し、わがきみと約まる如し、

第二節

○音便

音便

音便とは二音以上連なりて呼ぶべきに、他音に轉ずるものといふ、此音便は躰言と用言とに依り、おのく其規則を異にすこと、にいふ體言とは、名詞の類のみならず、副詞の類、及び動詞にても、語根、即ち其活にあづからざる部分、例へば、驚るのカ、訴ふのツツの類、一定して動き活かざるものといひ、用言とは動詞、形容詞、助動詞の類すべて語尾の動き活くもの、其活に係る所をいへるなり、

體言の音便は、用言の音便の如く一定の規則に従ひて、轉用をなすものにあらずして、ある語に限り、天然の法則より轉用するものにて、之を分ちて九種とす、

第一 段に轉ずるもの

第一

段に轉ずるものとは、わかさたなはまやらわ、又はいさしちにひみりる、などの各一段中に於て、おのく互ひに轉ずるをいふ、お段にてはわれ(我)をわれ、がや(や)をわ

文字

ぐ、わしる(走)をはしる、字音にてはせんあく(善悪)をせんなく、しんわ(親王)をしんわなり  
といふ類なり、古來通韻と稱せるもの皆此第一類中のものなり、

第二

第二 行に轉ずるもの

行に轉ずるものとは、あいうえお、又はかきくけこなほの一行中に於て、おのゝ互ひに  
轉ずるをいふ、あ行にてはら、はら(荆棘)のらばら、か行にてはあき(鷹)のあど、くびす(踵)の  
きびすの類なり、古來通韻と稱せるもの、皆此第二類中のものなり、

第三

第三 うと轉ずるもの

うと轉ずるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、すへてうと轉ずるものをいふ、  
即ちかいふり(冠)をかうぶり、せびと(冗人)をせうと、まへつぎみ(脚)をまうちぎみといふ類  
なり、

第四

第四 鼻音んを轉ずるもの

鼻音んと轉ずるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、すべてんと轉ずるものを  
いふ、即ちわらはへ(童)をわらんべつ、ささく(壁)をつんざく、おらな(煙)をおんなの類なり、

第五

第五 促音づを轉ずるもの

促音づと轉ずるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、づと轉ずるものをいふ、即  
ちをひと(夫)をどづと、たふとし(尊)をたづとし、ほりす(欲)をはづすの類なり、

第六

第六 韻字の添はるもの、

韻字の添はるものとは、あいうえおの横の五段の音尾に、おのゝその段の韻字添はりて  
語をなすをいふ、即ち詩歌をしいか、夫婦をふうふといふ類なり、

第七

第七 うの添はるもの

うの添はるものとは、あいうえおの横の四段、いづれとなく、其音尾にうの添はるをいふ、即  
ちたぶ給(た)うぶ、によばら(女房)をによらばうの類なり、

第八

第八 鼻音んの添はるもの

鼻音んの添はるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、其音尾にんの添はるをい  
ふ、即ちまな(眞名)をまんな、かひみる(隠)をかんがみるの類なり、

第九

第九 促音づの添はるもの

促音づの添はるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、音尾にづの添はるをいふ、  
即ちまたし(全)をまづたし、うたへ(訴)をうづたへの類なり、

ぐ、わしる(走)をはしる、字音にてはせんあく(善惡)をせんなく、しんわ(親王)をしんわなりといふ類なり、古來通韻と稱せるもの皆此第一類中のものなり、

第二

第二 行に轉ずるもの

行に轉ずるものとは、あいうえお、又はかきくけこ、なぬの一行中に於て、おのく互ひに轉ずるをいふ、あ行にてはうはら(荊棘)のいばら、か行にてはあき(鷹)のおど、くびす(腫)のさびすの類なり、古來通韻と稱せるもの、皆此第二類中のものなり、

第三

第三 うと轉ずるもの

うと轉ずるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、すべてうと轉ずるものをいふ、即ちか、い、ふり(冠)をかう、ぶり、せびと(兄人)をせうと、まへ(つぎみ)をまうちきみといふ類なり、

第四

第四 鼻音んご轉ずるもの

鼻音んと轉ずるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、すべてんと轉ずるものをいふ、即ちわらはへ(童)をわらんへ、つさ(壁)をつんざく、おう(姫)をおんなの類なり、

第五

第五 促音づご轉ずるもの

促音づと轉ずるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、づと轉ずるものをいふ、即ちをひと(夫)ををづと、たふと(尊)をたづとし、はりす(欲)をはづすの類なり、

第六

第六 韻字の添はるもの、

韻字の添はるものとは、あいうえおの横の五段の音尾に、おのくその段の韻字添はりて語をなすをいふ、即ち詩歌をしいか、夫婦をふうふといふ類なり、

第七

第七 うの添はるもの

うの添はるものとは、あいうえおの横の四段、いづれとなく、其音尾にうの添はるをいふ、即ちたぶ給をたうぶ、によはら(女房)をによらばうの類なり、

第八

第八 鼻音んの添はるもの

鼻音んの添はるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、其音尾にんの添はるをいふ、即ちまな(眞名)をまんな、かひみる(壁)をかんがみるの類なり、

第九

第九 促音づの添はるもの

促音づの添はるものとは、あいうえおの横の五段、いづれとなく、音尾にづの添はるをいふ、即ちまたし(全)をまたし、うたへ(訴)をうづたへの類なり、









此段例いまだみ當らず。

第五 第二七節

第五				あ
の	るも	轉す	つと	
			うづて	い
			討手	
		おづて	なづとら	う
		追人	納豆	
	にづた	はづけ	法華	え
	新田	はづけ	法華	
	をづと	たつとし	貴	お
	夫	たつとし	貴	

○お段

古くは例いまだ見當らず、俗かづとら(母隣)といふは、かゝるまにて此段なり。

○え段

例いまだ見當らず。

○お段

古くは例いまだ見當らず、俗とつとら(父様)といふは、かゝるまにて此段なり。

第二八節

あ
い
う
え
お

第六

第六			
韻の字は添のるもの			
			さ
			あ
			誘聲
		ま	まい
		い	か
		い	詩歌
		い	か
		い	つ
		い	う
		い	且
		い	そ
		い	お
		い	贈於

○あ段

さあ。古く誘聲なる「さ」の「い」省かれ、さゝに韻のそはりしなり。

○う段

ひい。文選西京賦、巨靈最眞注に作力貌又有力貌とあり、此字音ヒキのヒの韻そはりしなり。倍此眞の字、俗負に作るは誤、負は漕回切ハ、イにて最につく字にあらず、眞は虚器切音キ、最の省文、作力也と字書に見ゆ、と我友中根淑氏いへり。

ひい。和名鈔、遠江郷名に漕伊、并以、とあり、同書、山城郡名に紀伊、岐、備中郡名に都宇、津、同國郷名に弟、勢、勢、など一音のものは皆その一音の注あり、これらと和銅六年の詔、または延喜式

文字

〔民部二字を用ひよとありし頃、一音の地名に二字をば擇みてあてたれども、之を呼ぶには猶もとのまゝ一音なりしを以ての故なるべし、さるに此潤伊、及び大隅郡名の噺喚、これは古の襲の國なり、和名鈔に噺喚音於とありしとのみは二音を注せられしは和名鈔の頃は已に二音に呼びしからの事にて、即ち韻の添はれるものなり、

○う段

かつう。太平記、義經記等に且をかつうとあり、  
ないじゆう。豎は音樹なるをうをそへてあり、  
つう。備中國郡名和名鈔、都字津とあり、後つうとなり、又ついと轉ず、

○え段

此段例いまだ見當らず、

○お段

そお。前にいへり、  
はお。和名鈔、寶依、檣國府とみゆ、もとは一音なりしが、はおとなり、更にはいと轉じ、文字も寶飯と誤り書くに至れり、

第七 第二九節

第七				わ	い	う	え	お
のものは添のう						此段は即ち第六表なり		
たうぶ賜	はうぶる葬	まうく設	まうほる筵					によらばう女房
								を
								ほうい布衣
								とらうじ刀自

○わ段

はうぶる。書紀萬葉等は勿論、今昔物語、宇治拾遺等にも「はぶる」とみゆ、う添はりてはらぶる、  
まうく。古言、まうくなり、物語にはすべて「まうく」とみゆ、  
まうほる。うつは物語に「まうほるもの口に橘一ツ、柚三ツ、云々なり、か物まうほらで日比へぬ、土佐日記に「つんたる菜を親やまほるらん」とある、まほる」の延たるなり、むさばり食することなり、

○S段

文字

いまだ例を得ず、但し今にうめんといふは煮麴にうの入れるならんといふ説あり、さらば此段のものなり、

○う段

第六表と同じ、

○え段

いまだ例を得ず、

○お段

をう。 應ずる聲、をの轉せるなり、貞觀式に稱聞食刀稱皆稱唯又おを省きてをとのみもいへり、源氏落窪などに見ゆ、著聞集に「人の召す御いらへには男はよと申し、女はをと申す」とあれども、物語文には男女を通じてをといへり、又立走る聲、呼び叫ぶ聲にもをうといへり、をの轉のとうとはおのづから別あり、

ほうしよう(奉書紙)をう(彼、ふせ網なりの類多し、俗終に)といふを「をうく」といふも止の延びたるなり

第三〇節

わ	う	え	お
---	---	---	---

第八	
鼻音のん	ま。ん。な。眞。名。み。ん。な。み。南。ず。ん。す。誦。ス。え。ん。ぼ。う。し。烏。帽。子。と。ん。び。齋。
添のは	かん。が。み。る。鑑。し。さ。ぬ。ん。敷。居。ず。ん。ば。不。者。け。ん。み。毛。見。よ。ん。べ。昨。夜。
は	さん。じ。き。棧。敷。し。ん。に。ゆ。う。之。繞。よ。く。ん。ば。善。者。ゆ。ん。だ。う。馬。道。を。ん。ど。り。雄。
の	かん。じ。き。標。ひ。ん。の。日。野。ま。じ。く。ん。ば。間。敷。者。め。ん。ど。り。雌。
も	はん。べ。る。侍。信。地。名。す。ん。ば。以。下。は。活。字。の。條。に。も。へ。り。

○わ段

さん。じ。き。 古事記に佐受岐などに酒船をおき云々、神代紀、神功記にも假賤わり、古言「さずき」轉じて「さんじき」となり、更にさんざき」となれるに「棧敷」の字を填用せしなり、今は又「さんじき」といふ、

○う段

ま。さ。ひ。ん。 公事根源に内辨まきひんを仰す、まきひんは敷居なり、とみゆ、まきひの語は景

行紀、欽明紀、持統紀等にみえて古きことばなり。  
まんにゆう 之繞の字音まねうの「まにゆう」となるにんの入れるなり、定の字俗之入に作  
るは誤なり、

ひんの 和名鈔、信濃國、高井郡日野、比無野

第九 第三節

九	第	の	添はるも	つのは	促音	あ	い	う	え	お
なづそり	あづばれ	ちづと	しづかど	うづたへ	へづつひ	もづばら	はづて	なづそり	あづばれ	ちづと
納蘇里	道	些	確乎	風ト	竈	最	最手			
			ゆづたり	寛然	せづび	是非				

○あ段

あづばれ 歎聲の「あはれ」にづの入りしなり。

○え段

へづつひ へづつひは物語文にみえたり、

今のよに「ね、つ、から」といふも「根」からにて「根の下」に「つ」の入れるなり。

○お段

はづて 最手は相撲の頭、今の大關の事なり、物語文に多くみゆはづてははの下。づの加は  
りしなり。

母韻通 音通  
母韻通 顯加

うは母音發  
生の初聲

んつはうの  
變轉

右の九格の中第一なる段に轉するものは韻通第二、行に轉するものは普通第六韻字の添はる  
ものは、即ち其母韻の顯れ加はるものにて、これらは何れもげにさもあるべき事にて、條理判然  
たれども其他の六格は「うんづ、三音より成り立てる二様の格にて、抑々此「うんづ、の三音は何故  
に右の如く各段に立入りて自由にその音に代はるか、又何故に各段の音としか親密なる關係  
あるかといふに、是實に天然の規則よりするものにて、然らざるべからざる理由ある事なり、  
抑々うは母音發生の初聲にて、聲音の原始に係るものなり、これよりして「あ、い、え、お」となり、これ  
よりして「く、す、つ、ぬ、ふ、ひ、ゆる」の父音となるものなるものなれば、此「う」と他の四十九音とは、  
親子ともいふべく、本末ともいふべき最も親密にして相離るべからざる關係あるものなり、  
さてんといひづといふものは、共に「う」の變轉にして、「う」の音の喉より鼻に發するもの即ち「ん」と  
なり「う」の音發せんとして發せず、更に喉に復りて促るもの即ち「づ」なり、

文字

故にんといふも、つといふも畢竟うの變轉にして、要するにうに外ならざるなり、而してうは前にいへる如く四十九音に對しては、親とも本ともいふべき親密なる關係あるものなれば、さてこそ四十九音中かく縦横無碍に立入りて、其音を轉せしむるなりけれ、

されば以上九格中なる六格は、全く母音發生の初聲なるうの音に歸するもののみ、而して體言に於ては其變轉天然の法則に本づき、用言の如く一定の法則に依るものにわらず、是其の特殊の法則なり、

第三節

用言の音便

第三節

四段活

右の體言に就きての音便也、用言に就きての音便の體言の如く、ある言詞にのみ限るに非ず、總て其活に係るもの、何れの語も皆其法則によりて變轉するものにて規則甚分明なり、  
○引か引き、書か書き、のきひいこなる、即ち引いて、書いての如し

○寫さ寫き、押さ押き、のさも亦いこなる、即ち寫いて、押いて、

○討た討ち、勝た勝ち、のちの促音のづこなる、即ち討つて、勝つて、

○言は言ひ、思は思ひ、のひのうこなり、又促音のづこもなる、即ち言うて、思うて、言つて、思つて、の如し、

又此活のばびぶべこ獨音よりする詞、即ち呼ぶ、及ぶ、飛ぶ、學ぶ、の如きもの、うごもづこもならずして、鼻音のんこなる格なり、即ち呼んで、及んで、飛んで、學んで、の如し、

○進ま進み、屈ま屈み、のみ、の鼻音のんこなる、即ち進んで、屈んで、

○成ら成り、依ら依り、のりの促音のづこなる、即ち成つて、依つて、

第三節

右の四段の活なり、





いふが如き、不規則なるものなきにあらねど、そはいと稀なり。

第三六節 用言音便表

格變	容形	四 段 活							
		引	寫	打	言	學	呼	進	成
居有 らん	嬉 善	一 引かん	一 寫さん	一 打たん	一 言はん	一 學はん	一 呼はん	一 進まん	一 成らん
づて 居づて り	まじく シ シ ま シ	二 いて引いて	二 いて寫いて	二 づて打つて	二 づて言うて	二 づて言うて	二 んで學んで	二 んで呼んで	二 んで進んで
		三	三						
		四	四						
		階	階						

第三七節 轉音

○轉音

轉音とは、一語の合して一語となるとき、其音同行中のある音に轉ずるものをいふ、こは必ず同行中に轉ずるのみにて、同段中には轉ずることなし。

尙ほ此音便につきての委曲は、余が著せる音便考をみて知るべし。

受辭	助 動 詞				容 形	
	測推	消打	喩比	定決	嬉	善
んば	敷問 まじく	不 ず	如 く	可 く	嬉 しく	善 く

又其轉ずる上につきても、天然の法則ありて、第二音より、第五音に轉ずるものと、第四音より、第一音に轉ずるものと多し、即ち左の如し、

轉音は畢竟音便中の一種に外ならざるものなれども、本文二種の轉音は、おのづから一格をなすものなれば今は特別に之を示すのみ、

第二音より第五音に轉ずるもの、

きのは木の葉このは きがね黄金こがね にはさき荷前のさき  
ひのは火の穂ほのほ みなか真中もなか

第二音と第五音とは殊に親しく通ふものなることは、みちつき(蟬)をみちひき(ま)らかけ(老)をおよかけ、ちん(冬)をい(に)る(鹿)をのる、る(鹿)をざるな(ら)ふ(ま)ても知るべし、

第四音より第一音に轉ずるもの、

さけつき酒杯さかつき たけやぶ竹藪たかやぶ

かぜはな風花かざはな

てより(手筈)たより

むねさき胸先むなさき

なへころ(苗代)なはころ

めびさし目庇まびさし

ひえやか(冷)ひやゝか

あれかぜ荒風あらかぜ

むれくも(群雲)むらくも

こゑね(聲音)こわね

此類の多し、なび(酒盛)なな(か)まり、たけ(むら)の(竹)群をたか(む)ら、すげ(はら)の(音)原をすが(は)ら、かせ(さ)の(風)聲をかざ(さ)る、て(ま)き(さ)の(手)巻をた(ま)ま、て(の)そ(こ)の(手)の(底)をた(な)そ(こ)、かね(つ)の(鐵)鑪をか(な)び(つ)ち(ふ)ね(つ)の(船)聲をふ(な)つ(さ)ら、か(さ)の(上)巻をう(は)が(ま)ら、かせ(の)上(風)をう(は)か(せ)、ゆ(の)こ(風)をま(な)こ、む(め)を(ら)雨(聲)をま(ま)ざ(ら)せ、れ(び)と(稀)人(を)ま(ち)ら(う)せ、かれ(や)せ(の)油(山)を(か)ら(や)せ、こ(多)つ(くり)の(聲)作(こ)わ(づ)くりの(類)舉(ぐる)に(た)へ(ず)、

右の外つさよを(月)夜をつ(く)よ、あ(し)は(足)羽(を)あ(す)は、か(み)か(せ)の(神)恩(を)か(む)か(せ)の(如)き二音より三音に轉ずるもの、又(し)ろ(く)も(白)雲(を)し(ろ)く(も)て(の)こ(ろ)の(聲)を(た)な(こ)ろ(く)み(の)わ(は)の(水)之(池)を(み)な(わ)の(如)き五音より一音に轉ずるもの、又(も)え(き)の(助)黄(を)も(よ)き、ひ(え)を(り)

〔釋義〕をひよどり、の如き四音より五音に轉ずるものなほあれど、これら類多からざるものなれば、音便中第二類、行に轉ずるものとすべし。

第三八節

略音

○略音

略音とは、二音以上の語にして、一音の略かるゝものをいふ、これに正則、變則の區別あり、正則とは、其母韻の畧かるゝものはいひ、變則とは、母韻にあらず、又同音にもあらずして、畧かるゝものをいふ、

第三九節

正則略音

正則畧音

ながあめ(長雨)ながめ  
あさあけ(朝明)あさけ  
かはあひ(河合)かはひ  
まつうら(松浦)まつら  
あくうみ(飽海)あくみ  
みちのおく(陸奥)みちのく  
ながのがにわの韻あり、故にわ略かれて、ながめとなる、まつのつにうの韻あり、故にう略かれて、まつらとなる、他は之に准して知るべし。

第四〇節

變則略音

變則畧音

つばさいち(椿市)つばいち  
おほあがた(大懸)おほがた  
あがつま(吾妻)あづま  
あしがき(足搔)あがき  
ひむかひ(日向)ひむか  
ちかひご(誓言)ちかご  
つばさいちのさにははにも通はずして略かれ、おほあがたのおははにもかにも通はずして略かる、他も之に准して知るべし、故に變則といふ、

第四一節

又同音の字二ツ重なる時は、往々一音畧かるゝことあり、

かななへ(金鍋)のかなへ(難)となり、かははら(河原)のかはらとなり、かかるがゆるるに(故)のかるがゆるるにとなるが如し、  
おほち(大交)のおほち、おほは(大世)のおほは、くもる(陸奥)のくもる、と(止)のと(止)の類、尙ほ多し、  
此畧音も畢竟音便に外ならざるものなれども、おのづから一格をなすものなれば、今は特殊に之を掲ぐ、

第四三節

◎言語

我邦の言語は、體言、用言、助辭の三種より成立てり、

言語  
體言  
用言

體言とは、名詞は勿論、副詞(よく能くよろしく)の類は形容詞より來るものなれど、已に副詞となりては、よしよきよけれ、よろしよろしよしよしけれなどは活かず、常によくよろしくとのみ一定して用ひらるゝものなれば體言なり、接尾語(ばかりながら)がかりよりの類及びらつちの如き一音のものもすべて體言なり、等をいふ、

用言とは、動詞、形容詞、助動詞等すべて語脚の動き活くものをいふ、

助辭とは、天仁乎波、并に聲音をいふ、但し聲音中おはれあつばれの類は、用法によりてハ

名詞、即ち體言となることもあり、

今これを別ちて左の八類とす、

名詞

副詞

動詞

助辭

形容詞  
助動詞  
接尾語  
天仁乎波  
聲音

これに係辭、含蓄の二類を加へ、總て十類、これを我邦の文法とす、但此他に、枕詞、言掛、倒置、挿入の四法あり、今之を附録とす、

◎名詞

名詞  
有形名詞  
無形名詞  
實名詞  
虛名詞

名詞とは、總て事物の名稱にわたる詞をいふ、これに有形、無形の別あり、有形名詞は、一に實名詞ともいふ、山海、雨、雪、鳥、獸、草木の類、すべて形の見るべきあるものをいふ、無形名詞は、一に虛名詞ともいふ、寒、熱、聲、色、縱、横、上、下の類、すべて形の見るべきな

第四五節

きものをいふ、

名詞、一に體言と稱すれども、今は用ひず、とは此書に於て體言と稱するものは、前に入るが如き、意味極めて廣きものなればなり、

第四五節

普通名詞

固有名詞

又名詞には、普通名詞と、固有名詞との別あり、

普通名詞とは、天地山川草木鳥獸貧富貴賤喜怒哀樂の類すべて一般普通にわたる名稱をいふ、

固有名詞とは、亞細亞、日本支那、東京横濱、釋迦孔子、賴朝秀吉、玄上、琵琶の名、鈴鹿、同上、日本紀、孝經の類すべて其物につき特殊に有する名稱をいふ、

暹羅雞、カナリヤ(共に鳥名の如きは、固有名詞なる地名より轉じて、鳥の普通名詞となりしなり、澤庵漬、安陪川餅、サンドイッチ(食物名の如きは、固有名詞の人名地名より、轉じて食物名の普通名詞となりしなり、此類少からず、

第四六節

又單稱名詞あり、連稱名詞あり、

單稱名詞  
連稱名詞

單稱名詞とは、天地、山川、園林の類是なり、

連稱名詞とは、天變、地震、山里、川上、花園、梅林の類是なり、

連稱名詞には名詞二つより成るものあり、活語名詞(活語名詞の事は下にいへり)二つより成るものあり、又は名詞と活語名詞、或は未活詞(未活詞の事は下にいへり)と名詞、未活詞と活語名詞若くは未活詞二つより成るものあり、名詞二つより成るものは、

わさひ(明日)      ゆづ(冬月)      はる(春)      あさかせ(秋風)

みづをけ(水桶)      はりばこ(針箱)

活語名詞二つより成るものは、

うしに(生死)      おろふし(起風)      からまけ(勝負)

なまはじめ(挨拶)

名詞と活語名詞とより成るものは、

わさがすみ(朝霞)      ゆふぎり(夕霞)      ひぐれ(日暮)      こほりもち(氷餅)

うつし(鳥糞)

未活詞と名詞とより成るものは、

どほやま(遠山)      ちかみち(近道)  
 すそひろ(未廣)      こわだか(聲高)  
 未活詞と活語名詞とより成るものは、  
 ながばなし(長話)      どほのり(遊樂)  
 ひがよみ(辭讀)      まちをば(待遊)  
 未活詞二つより成るものは、  
 どほわさ(遊淺)      どほしろ(遊目)  
 ながみじか(長想)      しろくろ(白思)  
 うすわか(薄赤)      たかびく(高低)

第四七節 形状名詞

又形状名詞あり、音聲、情況、その他總ての狀勢を形容するものをいふ、泣くによ、こいひ、あくく、こいひ、笑ふにほ、からから、袋虫のち、鶯のひこくひこく、其他ほこくはらくほろほろこほくほのくうらくうつらくうつらくゆくらゆくら又はあきらかなめらかつぶらかまよらかまごかのごかの類

みなこれなり、

此形状名詞は、又はは、こいふ辭と連合して副詞となる、よくと泣くほどくと叩く、はのくと明く、うらくと霞む、あきらかに照る、まよらかに拭ふの類なり、但しど又はは、こいふけずうつらくうつらくゆくらゆくらなどを副詞といふ事もあり、委しくは副詞の部(第六四節)にさへり、

第四八節

數名詞

又數名詞あり、

ひご      ふた      み      よ      いつ      む  
 なな      や      ここ      こを      はた      みそ  
 よそ      いそ      むそ      ななそ      やそ      ここのそ  
 もも      ち      よろづ

此數名詞を取分きていふ時はつ、又は、ちを添へていふ、即ちひこつ、ふたつ、みつ、よつ、いつつ、むつ、ななつ、やつ、ここのつ、はたち、みそち、よそち、いそち、むそち、ななそち、やそち、ここのそち、もも

ち、これなり、

一より九まではつとひひ、二十よりはち、とふ、つ、ち、ともに箇の意にて、こは數名詞の接尾語なり、

どをはもどとなるを、どの韻、おの轉じて、とをとなれるにて、四の音讀をし、とひ、五の音讀をとおといふが如し、

又此數名詞は、人を數ふるにはひこり、ふたり、みたり、よたり、いつたり、むたり、ななたり、やたり、ここのたり、ごたりといふ、

ひとりはひとりの約轉、ふたりはふたりの約なり、古くは物品にもどるといへり、古事記に百取の机代と見え、神功紀に荷持田村といふも見えたり、

又漢字の音讀にては、

- 一 二 三 四 五 六 七 八
- 九 十 二十 三十 四十 五十 六十 七十
- 八十 九十 百 千 萬 億 兆 といふ、

此數名詞に、實數虚數の別あり、

實數名詞は正しく其數を指すものをいひ、虚數名詞は、其數を概していふもの、例へば小數にては、一〇二つに過ぎずといひ、大數にては八百萬、千萬といふが如し、

第五〇節  
連稱數名詞

連稱數名詞とは、此數名詞に他の名詞を連ねて呼ぶものをいふ、即ち

- 一日 二夜 三更 四時 五色 六歌仙
  - 七賢人 八神殿 九曜 十界 の類なり、
- これにも、實數、虚數の別あり、本文示すが如きは實數なり、又八十氏人、八千草、八百萬神の如きは虚數なり、

一本、二册、三卷、四張、五筋、六反、七束、八俵、九石、十貫の類皆之を連稱數名詞といふ、

第五一節  
未活詞

未活詞とは、動詞、形容詞等の語根、即ち未だ動き活かざるものをいふ、動詞にては、うた(歌)よと(選)ちか(懸)わた(渡)つく(作)、やはら



(和)ひが(懸)の類、形容詞にては、おほ(大)ひろ(廣)こほ(遠)ちか(近)ふか(深)あさ(淺)くろ(黒)あろ(白)の類、これらいつれも名詞に屬するものなり、

うたは、うたは。うたひ。うたふ。うたへ。よせはよせま。よせみ。よせむ。よせめ。と活く詞の語根なり、他もこれに准じて知るべし。うたよせ、はそのまゝ名詞となり、其他は、ちかごと(懸)ひわたせの(渡殿即ち廊)つくも(作物)やはらた(和也)ひがみみ(命耳)の類なり、形容詞なるは常にいふものなれば辨ずるまでもなし。

第五一節

御、懸、新の類の名詞

- おむ(御)    こと(懸)    にひ(新)    うひ(初)    はつ(初)    す(素)
- き(生)        えせ(卑拙)    くせ(曲)    もろ(磨)    いち(逸)    へ(部)
- へ(邊)        へ(方)        へ(重)        わ(曲)        か(巨)        て(入)

右の類すべて名詞なり、

とよは、懸祭のぼる、懸葦原などのとよすは、素顔、素腹、生地、生衣、えせは、えせ法師、えせ學者、いちち、逸足、逸物、部は群の意、其一團をさしていふ稱、方は、行方、目方、傍方、曲は、曲山、限曲、日は、三日、四日、ては、射人、騎人、捕人の類なり、さて此御より逸までの類を、接頭語といふ名稱を設け、その部に收むる説もあれど、種別の多きは學者の記憶を害し、且これらもどより名詞とすべきものなれば、今は取らず又部以下を接尾語とする説あれど、こは仍ほ名詞なり、

第五二節

活語名詞

活語名詞とは、活語より轉じて、名詞となるものをいふ、例へば霞はもごかすま、かすみ、かすむ、かすめ、烟はけむら、けむり、けむる、けむれ、と活く詞なるを、その第二階より据わりて、かすみ、けむり、といふ名詞となるものなれば、これを活語名詞とはいふなり、

此活語名詞は總て用音圖の第二階連用より成るものにて、即ち上一段活にてはき。に。ひ。み。いる。下一段活にてはけ。ね。上二段活にてはさ。し。ち。ひ。み。い。り。る。下二段活にてはえ。け。せ。て。ね。へ。め。え。れ。る。四段活にてはさ。し。ち。ひ。み。り。變格にてはさ。し。に。り。形容詞にては語根并にみ。さ。しみ。しさの類よりす、



詞																	
段		四			段												
め	いさめ(陳)	き	ひき(櫻)	ち	かち(勝)	ひ	うたひ(謠)	み	かすみ(霞)	り	こほり(氷)	き	ゆきき(往來)	あ	あわざ(爲業)	に	いさち(生死)
戒、警固、寢覺、水責	立消、山越、遠吠、生煮	枯木、隠家、穢、五月雨	据付	下書、人聞、傳、泳、懸	貸家、火消、散書、勾引	過、生立、放出	商、扱、争、祝、疑	痛、組合、住、處、巧、富	怒、偽、引、移、見、送	爲、事	死、水						

三階、四階、より名詞となるもの

形容詞の名

形容詞		格
活のくま	活のく	り
あさ	あみ	をりあひ(居合)
あさ	あみ	有無、有合
はげしさ(烈しさ)	いさまし(勇み)	暖々、黒み、青み
悲しさ、苦しき、嚴しさ	いたはしみ、いとしみ	憂さ、暑さ、厚さ、薄さ

活語より名詞となるものは、川言圖の二階連用より据るものなるは前にいへるが如し、これを稀にはなるいた(はね)とふ(はね)の類、四階よりなるものあり、これは板、火など名詞につく上より來たるものなれど、類いと少し、又人名にはきとふ(體)わたる(渡)のぼる(登)など、三階よりなるものあり、又稀には人名ならでも、ひづ(通)まづ(通)などいふもの、これらは、いづれも其截斷の性質よりなるものなれど、類いと少し。

形容詞より名詞となるもの、み、さ、しみ、しさの外は、くの活にては、語脚を捨て、語根よりするを例とす。

例へば、とは山、まる妙、なが夜、あさ、瀬の類なり。





疑問代名詞は、下にも。も。の。辭添はる時は疑問の性質變じて名詞に復歸することあり、

いづれもいづこともいづちもいづこもいづかたどの類なり、此疑問代名詞の事は、すべて係辭何の條下(四六九節四七〇節)に委しく言へり、

第六〇節

副詞

◎副詞

副詞は體言、動詞、形容詞、又は體言、用言、助辭の連合、及び重用等より成立つものにて、名詞にあらず、又活語にもあらず、一種の詞をいふ、

名詞にあらず、又活語にもあらずとは、例へばおもふに(能)といふが如き、動詞より來るものなれども、已に副詞となりては思ふを、思へば、なを活くものにあらず、よろしく(意)の如き、形容詞より來るものなれども、已に副詞となりては、よろしき、宜しけれ、なを活くものにあらず、さりとて又もどより名詞といふべきものにもあらずるの類をいふ、

副詞の名稱

副詞は一項、又は數語の上に位し、或は動詞、形容詞、若くは他の

副詞の上に副ひて、其一項、又は數語を起し、又は接讀せしめ、或は動詞、形容詞、若くは他の副詞の意味を委曲完全ならしむるものなり、

副詞の名稱は近來起れるものにて、もと西洋文法より出づ、故に我國の文法には允當ならざる所あり、例へば、すこぶる(類)、ほとんど(類)、いさ(類)、いさ(最甚)、の類、一語の上に副ふもの、如きは、其名稱適當なるに似たるも、それ(夫)、けだし(善)、たゞし(但)、むしろ(窮)の類、一項、又は數語の初に位するもの、及び疑問副詞より轉じて副詞となるもの(疑問副詞の事は次にいへり)の如きに至りては、妥當ならざるものあり、故に松木直秀翁はこれを冠頭辭と稱し、正音師は不動辭と名けられき、されど副詞の名は今日に於ては殆ど一般慣用の稱呼となれるものなれば、今はこれに依れるなり、

副詞の名稱は、右にいへる如く、もと西洋文法より出でしものなれば、隨ひてその副詞とするものも、西洋文法に混みて、我が國文法を誤るものあり、例へばきの(昨日)けふ(今日)いま(今)むかし(昔)の如きを、名詞と副詞とに分つの類なり、其説にをどつひも昨日も今日も雪のふれば(其)の昨日今日は名詞、今日もまた松の風吹く岡へゆかん昨日涼みし友に

副詞

ゆふやと山家の昨日今日は副詞、又、朝狩に今立たすらし萬の今は名詞、今いくかありて若菜、昔又は今こんといひしばかりに長月、昔の今は副詞といへれど、是等いつれも名詞にして、副詞にはあらず、又雪と消ゆ、花とちる、恩は山と高し、水は蜘蛛手に流る、の、雪と花と山と蜘蛛手の類を副詞といへるも非なり、こは雪、花、山、又は蜘蛛手などいふ名詞を、ど、又はにの天仁乎波にて受けたるものにて、此どはの如くといふ意の辭なるは、天仁乎波の部(第三一五節)にいふが如く、には花に見んとしのにと同じく、是もの如くにといふ意なる事、同部三〇二節)にいふが如し、

第六一節  
體言より成立つもの

體言より成立つものは、それ夫これ(是おほむね(大旨)おほよそ(大凡)おぼらく(尠)もはら専の類、字音語にては、大概、大抵、一切、萬一、の類なり、

例へば、それが處、これの家、などいへば、指示代名詞なり、おほむねを掲ぐ、おほよそを示す、まばらくの程、心をもはらにして、なをいへば、名詞なり、ざるを、それ人として、これ之が爲めなり、おほむね皆然り、おほよそ世に立つ人、しばらく記して、もはら勉む、なをいへば副

詞となるが如し、字音語もこれに同じ、尙ほこの事は末の例語の左に言ふをも考へ合すべし。

第六二節  
動詞より成立つもの

動詞より成立つものは、たごひ(縦合)うち(打)任せ(打)笑ひ、のうと、さし(差)置く、差押ふ、のさし)の類、形容詞よりするものはよく(能)よし(縦)けだ(し)蓋の類なり

たごひはは行四段、うちはた行、さしはさ行、共に同じく四段の各二階より轉じて來るもの、よくは形容詞く活の二階、よしはく活、けだはまゝく活の各三階より轉じて來れるものなり、體言、用言、助辭等の連合より成たつものは、もごより(固)かならずしも(必)さかんに(盛)あきりに(類)はたして(果)きはめて(極)いはんや(現)うちつけに(率)解るかのみならず(加)之こゝをもて(是)以(か)るかゆるに(故)の類なり、

第六三節  
體言、用言、助辭等の連合より成立つもの

もどよりは(素)といふ名詞とよりといふ接尾語との連合、かならずしも(必)の體言としも(天仁乎波)との連合、さかんに(は)ら行四段二階さかりの音便さかんと、天仁乎波にどの連





形状名詞の  
重用より副  
詞となるもの

るが如し)の類、非にから〜とかう〜と(右にのするが如し)の類は、是亦形状名詞を天仁乎波のに又はとにて受けたるまでのものにて、共に副詞といふべきものにはあらず、さるは副詞はすでもいふ如く、名詞にあらず、又活語にもあらずる一種の詞を限りていふものにて、これらまは〜かつ〜の類は形状名詞又つまびらかにから〜との類はつまびらかにから〜は、形状名詞にといひ、とといふは、天仁乎波として更にまをひなさもなればなり、されどもこれらの語今は大かた副詞とし、是彼の辭書にも皆副詞と注せる事なれば、今これを改めんは、中々に初學の惑ひともなりぬべく、又之を副詞としておかんにも、文法上別に密ある事にもあらずれば、今は姑くこれに従ふのみ、

動詞の重用より副詞となるものは、二階よりする格なり、まみ〜(ま〜つぎ)〜(ま〜)とり〜(各階)、たえ〜(絶々)の類、これら又に或はとに連合してまみ〜とつぎ〜になどもいへり、これらも、右にいへるが如く、實はまみ〜とつぎ〜は活語名詞にて、これににどの天仁乎波の添ひたるまでのものなれども、姑く副詞と稱するのみ、

又動詞の三階を重用するもの、ます〜(ま〜)の如き、形状名詞となりて副詞と稱すべきものもなきにあらざれども、(動詞の三階より名詞となるもの、事は活語名詞の條下(第五四

三階の重用  
は、連用と  
なる

節)に言ひおけり)をはいと〜稀にて、大方は元來の性質動詞の儘に居据るものなり、即ちみる〜(看ささ〜)〜(開きゆ〜)〜(行々)おそる〜(恐々)の如し、之を副詞といふは、誤にて、仍は動詞なり、そも〜三階は截斷する詞なれども、之を重用する時は性質變じて、連用となること、例へば助動詞[五〇]の三階つは進みつ、退きつなを、截斷するものなれば、之を重用してつつといふ時は進みつ、退きつといふが如く、連用となるが如し、さればみる〜ゆ〜の類も、動詞三階の重用までにて連用に變ずるもの、副詞には、あらずと知るべし但し、拾遺なる、君が住む宿の梢をゆ〜とかくる〜までにかへりみしはやといふ歌のゆ〜とを行〜の意として解釋する説は誤れり、こは萬葉に「丹生の川瀬は渡らずてゆ〜とこひたさむがせこちかよひこね」といふ歌のゆ〜とと同じく大舟のゆ〜らゆ〜らにといふゆ〜らゆ〜らの意よりなるものにて、物思ひにおもひたゆたふさまをいふ形状名詞に、行く〜の意をかけたるものにて、單に行〜の意にはあらず、

第六五節  
動詞形容詞  
より轉ずる  
もの

動詞、形容詞より轉じて副詞となるものは、其意もまた各其本來のものは徑庭あり、例へばはじめて始て、つごめて勉て、は



つゞくるも

た(將)また又および及の類なり、

それけだしおよそおもふにの類は、一項又は數語の始に位し、或は語を起す如き時にも用ふ、そもくかるがゆゑにこゝをもてたゞしの類は前を承けて、更に語を起す如き時に用ふ、むしろさてはたまたおよびの類は前に接続して、語を續くる如き時に用ふ、

第六七節

動詞、形容詞、副詞の初に副ふもの

動詞、形容詞、若くは他の副詞の初に副ひて、意味を完全ならしむるものは、盛に戦ふ、悉く潰ゆ、頗る多し、ほごく危し、大むねみな然り、ひごりみづから樂しむの類なり、  
盛に戦ふ、悉く潰ゆ、は動詞に續くもの頗る多し、殆ど危し、は形容詞につゞくもの、大むね、ひごり、はみなみづから等の他の副詞につゞくものにて、これら其連用上其委曲を言ひあらはし、意味を完全ならしむるものなり、

第六八節

おし、かき、ふり、ひき、さし、うち、さし

おしはかる、かきかぞふ、ごりよそふ、うちかすむ、ふりすつ、たぢまさる、ひきつらぬ、さしおく、もてかくす、あひみる、などの、おしかきごりうちふりたぢひきさしもてあひの類、また皆副詞なり

もてあひり、

おしは、おしなべて、おしひろむ、おしのく、おしごやむの類、かきは、かきつくるふ、かきなづ、かきならす、かきはらふの類、ごりは、ごりあつかふ、ごりごやむ、ごりつくるふ、ごりなす、ごりいるの類、うちは、うちまざる、うちわらふ、うちなく、うちかたらふ、うちなびく、の類、ふりは、ふりおこす、ふりすつ、ふりむく、ふりかへる、ふりいづの類、たぢは、たぢまざる、たぢかへる、たぢさかゆ、たぢのく、たぢいづの類、ひきは、ひきあつ、ひきうく、ひきあふ、ひきかふ、ひきつく、の類、しは、ししまねく、ししかくす、ししかへる、ししとやむ、ししうつむく、の類、もてあはやす、もてあそぶ、もてまづむ、もてなやむ、もてかしづくの類、あひは、あひかたる、あひおもふ、あひゆづる、あひまそふ、あひなるの類、此あひはもとは行四段の二階より轉じて各互の意を顯す副詞となれるなり、これらいづれも動詞より轉じて副詞となれるものなり、又ほのみる、ほのさく、ほのくらし、なほいふほの、まばなく、まばたく、まばたつ、なほいふまばの類は體言よりなれる副詞なり、又今の世書翰文などに用ふる罷り在る、罷り越す、罷り出づ、なほいふまかりも中古よりはやくみえたる語にて、動詞より轉じて副詞となれるものなり、

はのまば  
まかり

めゆ

副詞

副詞は概して語のはじめに置くものなれども、場合によりては語尾に置くことあり、ゆめこいふを、怠るなゆめ、忘るなよゆめこいふが如し、こは其語勢を強からしめんがために、ゆめ怠るな、ゆめ忘るなよ、こいふべきを倒置せるものなり、  
 倍此ゆめこいふ副詞に二種あり、禁戒のゆめこ、苟且のゆめこなり、禁戒のゆめにはその前後禁止の辭、即ちななかれを置く、即ちゆめ怠る事ななかれ、ゆめ忘るな、の類なり、  
 苟且のゆめは即ち苟且かまにも、の意にて、轉じては僅少こいふが如き意にも用ふ、苟且の意なるはゆめにも知らず、ゆめ覺えず、ゆめ忘れんやの類、打消の辭、又は反語をそへていへり、僅少の意なるは、多くゆめばかりなごいへり、

浪立つなゆめ（萬ありこすなゆめ）、やすいしなすなゆめ（萬あり）、うつろふなゆめ（野恒）

妻ゆめ更々に人にみせ玉ふ（後藤）、ゆめ心おと玉ふ（若菜下）

これら禁戒のゆめなり、

ゆめにさこしめし入れぬ（さまくの悦）

此中將の君ゆめにおほしたらず（見はてぬ勢）

ゆめにもまゝり玉はざりければ（未摘花）

これらは苟且のゆめなり、

たき物は此御裳着に玉はせたりしをゆめばかりつゝみて（落くほ）

春のよのゆめばかりなる手枕（千載）

これらは僅少のゆめなり、

ゆめの語はもと一なるを、慣用上かく二種に別れたるなり、さて、古事記遠飛鳥宮の段の歌に宮人騒ぐ里人もゆめ、といひ、我がたゞみゆめ、云々我が妻はゆめ（允恭紀、妻をゆめ、どわり、萬葉汝が心ゆめ、どわるが如きは、禁止の辭なけれども、こは言外に含めたるなり、又重之集にゆめなのりそやたたりもどする、どわるは誤なること、次條いふが如し、

副詞

いたくな侘びそ、ふきな散らしそ、なごいふなは助動詞（五六）六

めゆ

副詞は概して語のはじめに置くものなれども、場合によりては語尾に置くことあり、ゆめこいふを、忘るなゆめ、忘るなよゆめこいふが如し、こは其語勢を強からしめんがために、ゆめ忘るな、ゆめ忘るなよ、こいふべきを倒置せるものなり、  
 倍此ゆめこいふ副詞に二種あり、禁戒のゆめこ、苟且のゆめこなり、禁戒のゆめにはその前後禁止の辭、即ちななかれを置く、即ちゆめ忘る事なかれ、ゆめ忘るな、の類なり、  
 苟且のゆめは即ち苟且かきまにも、の意にて、轉じては僅少こいふが如き意にも用ふ、苟且の意なるはゆめにも知らず、ゆめ覺えず、ゆめ忘れんやの類、打消の辭、又は反語をそへていへり、僅少の意なるは、多くゆめばかりなごいへり、

浪立つなゆめ（萬）ありこそすなゆめ（萬）やすいしなすなゆめ（萬）心あれ（萬）うつろふなゆめ（萬）

夢ゆめ更々に人にみせ玉ふ（後）ゆめ心おさ玉ふ（若）

これら禁戒のゆめなり、

ゆめにさこしめし入れぬを（さま）の悦

此中將の君ゆめにおぼしたらず（見はてぬ夢）

ゆめにも去り玉はざりければ（未摘花）

これらは苟且のゆめなり、

たき物は此御裳着に玉はせたりしをゆめばかりつゝみて（落くば）

春のよのゆめばかりなる手枕に（手枕）

これらは僅少のゆめなり、

ゆめの語はもと一なるを、慣用上かく二種に別れたるなり、さて、古事記遠飛鳥宮の段の歌に宮人騒ぐ里人もゆめ、といひ、我がたゞみゆめ、云々我が妻はゆめ（允恭紀）妻をゆめ、とあり、萬葉汝が心ゆめ、とあるが如きは、禁止の辭なけれども、こは言外に含めたるなり、又重之集にゆめなりのそやたたりもぞする、とあるは誤なること、次條いふが如し、

いたくな侘びそ、ふきな散らしそ、なごいふなは助動詞五六六

な

階禁止のなの轉じて副詞となるものなり、

な何そのそ。

此なはいたくふさなをいふ語の尾に附くものにはあらず、侘び散らしの上に附くものなり、さればいたくといひふさといふは「いたく侘び」「ふさ散らし」と連用しなは其中間に入るのみにて、猶ないたく侘びる、な吹き散らしと、といふに同じ、そは萬葉に「なふみそね雪は」野への秋萩なちりそねなとあるにて知るべし、さて此な何そといふなは禁止の意の副詞、そは其の意の助辭にて、軽く添ふるものなれば、萬葉には「いでくる月に雲なたなびき」「我なしとなわびわがせこそなと、そは略さてもいへると、後世は却てなを略して「ちりぬとも外へはやりそ」「夫木角あればとて身をばたのみそ」「夫木なをいへるは誤なるよし先輩いへり、前に引ける重之集なる、ゆめなのりそや」といへるもこれと同じ誤なり、尙此の事は天仁乎波の條にもいへり、

山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびを我みはやさん

戀しくはみてもまのばん紅葉葉を吹きな散らしと山おろしの風

古 古

第七一節

よもえをさく

よもえをさく さらさらさらさら

これらの副詞にも打消又は禁止、若くは反語を添ふ

さらさら

たどひ

たどへ

又たさひたさへの下はともにて受く

例へばよもゆかじ、よも忘るべしや、え聞かず、えさらぬ事、ささく劣らず、をさく類なり、さらさらさらさらなねな、更に心ゆるすな類なり、

これは縦令の意のかたなり譬へばのかたにてはあらず、又豈は副詞より出で、反語となるものなり、故に反語の部(四七二節)に收む、さてあにといへは必反語にて受くる例なり、初學往々誤る者あれば、言のついでにおぼろかしおくなり、

第七二節 疑問副詞

いくいつなにいかにかい、いかでいつしかいつかはいかばかり、いづくはくの種類を疑問副詞とす、こは疑問詞なるをもて、打任せては係辭となる事なれども、いかでいかにかいつしかいつぞや、いづくはくいかばかりの種類は副詞の儘にて用ふることもあり、

これらいづれも用法によりて係辭ともなり、又副詞ともなるものなり、但しいかではナン  
トシテの意なるは係辭、ナニトソシテの意なるは副詞なり、此ナニトソシテの副詞の下は  
多くばばや、との天仁乎波、又は願のがな、或は六階の希求にて受く、

いかに此人の爲めにはどなき手をいだし

帚木

いかに此かくや姫を得てどがな、見てしがなと

竹取

まめやかにいかに對面もがな

落くば

いかに哀にも、やさしくも、さまぐなる事の侍りしかば

大鏡

今思へばいかにかざる事なりけり

若な下

大方いと騒がしういづぞやの心地して

鳥邊野

春と秋とはいづれおろかは侍らねども

十三物争

いかにばかり御心に入れていどみさせ給へりしかば

大鏡

そのあまりのいとまいくばくならぬうちに

徒然草

いづしかおはしましつきてみ奉らせ玉へば

日蔭葛

年をへてもろくなりゆく涙哉いづか限の秋の夕暮

新後

第七三節

疑問副詞轉じて名詞となるもの

此疑問副詞は名詞と連合し、轉じて名詞となることあり、いく

か幾日いくよ幾世、幾夜いくへ幾重いくこせ幾年の類なり、

けふは先いつしかさなげはど、さす春のわかれもわする斗りに

新勅

雪の内にこえしもまゐる梅かえにいつしか花の開けぬる哉

長秋詠草

いかにばかり都を遠く隔てさぬ其かみ山にかゝるしらくも

續拾

衣うつ音は枕にすが原やふしみの夢をいくよ残しつ

新

淡路島通ふ千鳥のなく聲にいくよぬざめぬすその關守

金

つれづれとながめくらせば冬の日も春のいくかにことならぬかな

玉

高砂の尾上の櫻尋ねれば都の錦いくへかすみぬ

新勅

いくとせの春に心を盡しきぬ哀とおもへみよしの花

新

思ふ事なるとはなしにいくかへりうらみわたりぬかもの川波

狹衣

これらいくよは連夜、いくかは數日、いくへは數重、いくとせは連年、いくかへりは數回にて

いづれも名詞に轉せるもの例へは、いくよ残しつは連夜残したりとの意にて幾夜か残し

つる、と疑ひ問ひかくるにはあらず、幾夜寢覺りぬは連夜ねざめたり、の意にて、幾夜か寢





は他の副詞の上に副ふものをいふ、これらの種類の詞は其數實に夥しくして示すに堪へず、

第七七節

そもく歌のさま六つなり、からの歌にもかくぞあるへき、古序かくかくてかくのごと等は副詞なり、かくのごとく、かくのごとしは、かくは副詞にて、他は天仁平波と、助動詞、またかゝるは斯くあるの連合にて、かゝるかゝりかゝるかゝれど、活くものなれば動詞なり、

第七八節

それまろら詞は春の花匂ひ少くして云々、かつは人の耳におそり、かつは歌の心にはちおもへど、古序かつはのかつは副詞にては天仁平波なれど、已にかつはと連合するものなれば副詞とする事、かくてを副詞とするに同じ、

第七九節

元日なほ同じ泊なり、云々、えのますなりぬ、云々、たゞ押鮎の口をのみぞ吸ふ、土佐日記  
なほなほさらなほざりに共に副詞なほざりに猶然<sup>なほ</sup>ありの約なり、たゞたゞし共に副詞

第八〇節

或人の子のわらはなる、ひそかにいふ、まろ此歌の返しせんといふ、驚きていごをかしき事かな、云々、はやいへかこし、云々、やがていにけり、そもくいかによみたるごいぶかこしがりて問ふ、この童さすがにはちていはず、土佐日記

第八一節

九日つごめて大湊より云々、これかれたがひに云々、土佐日記  
つごめては、ま行下二段二階のつごめより助動詞のてに運用せしが轉じて名詞となれるものなり、たがひに副詞なれども、たがひの、なさいふ時は名詞となる、

第八二節

竹取の翁さばかり語り語らひつるがさすがに覺えて眠りをり、竹取さばかりさすがに又さばかりもさばかりにさほささまでなるほほにさりながらさりどてまかすがにまかしながらの類みな然と接尾語及び助辭等の連合に成れる副詞なり、

第八三節

すべて男も女もわるものはわづかに老れる事を残りなく見せ盡さんとおもへるこそいさをしけれ、帝木

すべては行下二段二階のすべより、助動詞のてに連用せしが轉じたるなり、又わづかにのわづかは形状名詞にの天仁乎波と連合して副詞となれるもの、はるかのかうらゝかゆたかおもむろの類皆名詞これら形状名詞の委しき事は名詞の條下にいへりなれどもにの天仁乎波と連合して副詞とはなれるなり、

第八四節

こゝにむそちの露の消方に及びてさらに末葉のやごりを結べることあり、方丈記

こゝにのこゝはもと指示代名詞なり、故にこゝに在ること一年、なほいふ時はこゝは名詞、には天仁乎波なれども、本文のこゝに又はこゝにおいてこゝをもてなほいふものは副詞なり、

第八五節

あるひはほのほに巻かれてたちまちに死に、或は又僅かに身一つからくしてのがれたれども、資財を取りいづるに及ばず、

七珍萬寶さながら灰燼となりなき、方丈記

あるひはは或る謂は約或るは有るより轉せるにて、ある或、あるは或、あるひは或、ともに副詞、からくしてからうじては共に辛くしてより轉じたるものなり、

第八六節

よき人ののごやかに住みなじたる所は、さし入りたる月の色も、ひこきはあみくこみゆるぞかし、徒然草

第八七節

綾小路宮のおはします小阪殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、云々、まことや鳥の群れ居て、池のかへるをこりければ、徒然草

いつぞやは疑問副詞の更に轉じて副詞となれるもの、まことやは誠の名詞と、感歎のそと連合せるなり、

第八八節

つゆたがはざらんご向ひ居たらんは、ひこりある心地やせん、たがひに言はん程の事をば、げにこきくかひあるものから、い

さゝかたが、ふ所もあらんこそ、云々、徒然草

いさゝか、いさゝめには副詞なれども、いさゝかのいさゝめの時、いさゝめは名詞となりて、の  
は天仁乎波なり。

第八九節

これほどの事をばさかくにも及ばねども口をしき事をもし  
つる下野守かな、保元

これはさのこれは指示、代名詞、ほどの接尾語と連合して副詞となりし也、とかくのとはど  
ばかりなきいふとにて天仁乎波のどより轉じて副詞となるもの、かくは副詞の斯く、とか  
くは兎角の字より出でたるにはあらず、此字を填てたるもののみ、どにかくとにかくと  
もかくもどやかくやどやかくとどてもかくてもどにかくにももの類みな此どかくと天  
仁乎波との連合に成れる副詞なり。





第九〇節

動詞

◎動詞

動詞とは、用言圖に示せる上一段活、下一段活、上二段活、下二段活、四段活、變格の六種より成立つものをいふ、

動詞、形容詞、助動詞の各活用

動詞と、形容詞、助動詞とは、その階級、性質、係辭、時等のさまは一様なるものなれど、其活用に於ては各々同じからず、即ち動詞は専ら其作用を顯はし、形容詞は其形狀を示し、助動詞は常に動詞の下に附きて、其活を助く、又動詞助動詞には自他の活あれども、形容詞には其事なく、且受辭も此三種各々同じからざるが如き、判然區別あるものなり、

第九一節

動詞は名詞に伴ひ種々に活動して、意旨をいひあらはすものなり、例へば徳ををさめ、智をみがき、身をたて、家をおこすといひ、春さり、夏きたるといふ、をさめ修みがき、磨たて(立おこす)興さり(去きたる)來といふもの、如し、これを動詞といふ、

修はをさめ、をさむ、をさむ、をさむ、をさむ、をさむ、と下二段に活く詞、磨は、みがか、みがき、みがく、みがけ、と四段に活く詞、立はたて、たつ、たつる、たつれ、たてよ、と下二段に活き、興

動詞

は、おこさ。おこし。おこす。おこせ。と四段に活き、去來は、共にらり。れ。と四段に活く詞なり。

第九二節

將然

動詞には將然、連用、截斷、連名、已然、希求の六階あること、用言圖に示すが如し、

將然とは將に然らんとする詞、未だ然らざる詞、又然らざる詞等にわたる名稱なり、これを第一階とす、此階は受辭を得て始めて其將然の性質を全くするものにて、受辭なき時は未だ語を成さざるなり、

受辭の事は後にいふべし、さて受辭を得て其性質を全くすとは、例へば修めん磨かず、立てぬ、興さましの如く、んすぬの如く、ましの受辭をひて、始めて語を成すをいふ、但し修め、立て、の如きは、其儘にても語を成すが如くなれど、こは二階の連用を兼ねるものなるが故に、しか思はるゝものにて、一階の方にては決して語をなさざるものなり、然る所以は用言圖第一階を通過せば、辭を待たずして明かなるべし、

第九三節

連用

連用とは、總ての動詞、及び受辭に連り用くものにて、之を第二階とす、一に連續ともいふ、此階は受辭の有無に拘はらず、其性質を表はすものなり、

例へば修め、磨き、立て、興し、といふは、連用なり、又修め成し、磨き上げといひ、又は立てけり、興しつゝといひても連用なるが如し、

動詞、形容詞に通じて、此連用に、句を隔て、かゝるもの多し、例へば、まづ心なく花のちるらんといふ、まづ心なくの連用は花にかゝるにわらず、散るといふにかゝり、あぢきなくまつ人の香にあやまたれけりといふ、あぢきなくの連用は、待つ人といふに續くにわらず、あやまたれけり、といふにかゝるが如し、これらのとよく注意せざれば、意を誤ると多し、後撰に「うさ沈み淵瀬にさわぐには鳥は」といふ歌、普通本にはうさ沈むとあり、浮き沈むといふ時は「うさ沈む」の語、淵瀬といふにかゝりて淵瀬のうさ沈む事となる、抄本にはうさ沈みとあり、然る時は淵瀬といふを隔て、うさ沈みさわぐには鳥と連用するなり、されば抄本の方まざるが如くなれども、浮沈む淵瀬といひてもあながち聞えぬことはなし、又詞を重ねるには、此二階に於てするを正格とす、かさねがさね重々かかれく、枯々ゆきゆ

句を隔て、かゝる連用

き(行)おもひおもひ(思)なぞの如し、但し形容詞は異なること、其條下にいふべし。

第九四節 截斷

截斷とは、截ち斷るゝ詞にて、下に續かざるもの、一に斷止ともいふ、これを第三階とす、

例へば學を修むといひ、功を立つ。刀を磨く。國を興すといへば、皆截斷して下に續かざるが如し。

此階は受辭を得る時は、其性質を變ず、

例へば修むらん立つ。べし。磨くとも、興すめり、といへば截斷せずして受辭に續くが如し。

第九五節 連名

連名とは、名詞に連なるもの、一に連體ともいふ、之を第四階とす、

例へば修むる學。磨く刀。立つる功。興す家の如し、

此階も受辭を得れば、其性質を變ず、

例へば修むるまで、磨くかな、立つるに、興すよりの如し、

第九六節

已然とは、已に然るをいふ、將然と正に相對するものなり、これ

已然 を第五階とす、此階は受辭を得て始めて其性質を全くすること、亦將然の如し、

例へば、修むれば、磨けと立つれもの如し、さて此階は上にこそその係辭ありて、其結辭となるの外は、受辭を得ざれば語をなさず、即ち學をこそ修むれ、玉をこそ磨け、の如く上にこそその係辭あれば修むれ、磨け、は其結辭となりて截斷すれども、係辭なき時は修むれ、磨けにては語をなさざるが如し、但し磨けの如きは、其儘にても語をなすが如くなれど、とは六階の希求を兼ねるものなる故に、まか思はるゝものにて、五階の方にては決して語をなすを得ざるなり、

第九七節

希求とは、希ひ求むる詞、又命令する詞、一に使令とも、又下知ともいふ、此階には受辭なし、

希求とは、例へば修めよ、立てよ、磨け、興せの如し、

此階中、四段活、并に加行良行の變格にありては、よの添はざるが通例なれども、又之を添へてもいへり、又下二段にて古き例には、よを添へざるもあり、



第九八節  
四階、五階  
の係辭

右の内四階の連名は、上にぞかやなん何の係辭ありて、これを  
受け、又五階の已然、上にこそその係辭ありて、之を受くる時は、其  
連名、又は已然の性質を變じ、全く結辭となりて截斷す、

例へば、四階にては、學をぞ修むる、身をか立つる、玉をぞ磨く、業をなん起す、の如く、又五階  
にては、學をこそ修むれ、玉をこそ磨けの如く、これらいつれも其當然の性質を變じて、係辭  
の結辭となりて截斷するものなり、

第九九節  
係辭

係辭とは、ぞかやなん何とこそをいふ、係辭ある時は、必ず下  
にてこれを結ぶことにて、之を結ぶものを結辭といふ、ぞかや  
なん何の結辭は、動詞、形容詞、助動詞に通じて、必ず四階に於て  
し、こそその結辭は、必ず五階に於てす、

用言圖の初に、係辭の欄を設け、四階、連名の次位に、ぞかやなん何と標示し、五階、已然とあ  
る次位にこそと標示せるは、これらの係辭の結辭、其階にあることを示せるなり、

係辭、結辭とは例へば、戸を閉づ、事を任す、といへば閉づ、任す、にて截斷する例なるを、上に

係辭のぞかやなん何ある時は、即ち、戸をぞ、戸をか、戸をいかで、又は事をや、事をなんとい  
ふ類閉づ、任す、とはいはず、必ず閉づる、任するといひ、又上にこそとある時は、戸をこそ、  
事を、こそと類必ず閉づれ、任すれといふ、

第一〇〇節  
受辭

一階より五階に至るまで、各階皆受辭あり、受辭とは此五階を  
それ／＼に受くる助動詞、天仁平波、又は接尾語を稱す、此受辭  
を得て、將然、已然、の二階はおの／＼其性質を全くし、截斷、連名  
の二階は各其性質を轉じて、受辭に連續す、唯連用一階のみは  
受辭の有無に拘はらず、常に其連用の性質を有すること、上に  
いへるが如し、

三階の受辭中、めりらんらしへしの四つは、用言圖 三六 動詞ら  
行變格同甲より壬まで、四四より四九まで、助動詞めるよりけ  
るまでの六種および 五五の乙(へかる) 五七(ざる) 五八の乙(まじか

各階受辭

るに限り四階を受くる例なり、

例へば、有るゆゑ、引けるらん、善かるらし、悲しがるべしの類なり、助動詞の事は、其條下に於ていふべし、

受辭に續く法、例へば一階の受辭は、ずでぬんめばましな(願)にして此内ずでぬは何れも用言圖、四六打消不の活にて、すべて一階を受くる格なれば、ずの一辭をだに掲げば、他は此内に含むべく、んめは同じく、六三想像甲の活にて一階を受くる格なれば、んの一辭を掲げば足るべしとらへども、猶初學の爲めに一々之を示せり、又二階の受辭中てまかたりけりつるぬる等のつるは用言圖、五〇輕過去てつるつれてよと活くもの、ままかは、五一中過去、けきままかと活くもの、たりは、四八輕過去たりたりたるたれ、けりは、四九中過去けりけりけるけれぬるは、五二重過去、なにぬぬるぬれぬと活くものなれば、一階の受辭に准すれば一々之を示すべし事なれど、さてはいと煩はしければ、其内の一二を示せるなり、三階のゆゑにまじなり(歎)四階のなり(決)皆これに准じて知るべし、

第二〇二節 ○動詞、助動詞、の時

動詞、助動詞の時

總ての動詞、助動詞に時と稱するものあり、時とは未來、現在、過去の三をいふ、

未來

未來とは未だ來らざる時にて、これに三つの區別あり、即ち將に然らんとするものと、未だ然らざるものと、然らざるものとなり、一階の將然に係るもの皆これなり、

例へば、今行かん、未だ歸らず、去らざるの類、用言圖一階、將然中の諸活より受辭にかゝる者は、なり、此活は受辭を得て始めて其性質を全くすること、前にいへるが如し、

現在

現在とは今現に然ある時をいふものにて、即ち三階の、截斷これなり、

例へば、行く、歸る、去る、の類、その現在然あるをいへるもの、此活は受辭を得る時は却て其性質を變ず、行くらん、歸るべしの類、用言圖三階、截斷中の諸活皆是なり、

過去

過去とは已に過ぎ去りし時をいふものにて、即ち五階の已然これなり、

動詞

輕過去  
中過去  
重過去

第一〇二節

第五表

三過去表

例へば行け。歸れ。去れ。の類、用言圖五階已然中の諸活より受辭にかゝるもの皆是なり、此活は將然と同じく受辭を得て始めて其性質を全くすること、前にいへるが如し

過去に輕過去、中過去、重過去の區別あり、此區別は階に依て別るゝにあらず、助動詞の種類、及び其の組織に依りて別るゝものなり、即ち左の如し、



小過去、中過去、大過去、現在過去、半過去、全過去

第一〇三節  
三過去中の時

第一〇四節

本文に謂ゆる助動詞の種類とは本表甲、乙、丙、丁、巳、の如く、用言圖中に入るものといひ、組織とは戊、庚、辛の如く、用言圖中二欄の連合より成るものをいふ。

輕過去、中過去、重過去の稱は、或は小過去、中過去、大過去、といひ、或は現在過去、半過去、全過去などいへり。

表中甲乙の二欄は輕過去、丙丁戊の三欄は中過去、己庚辛の三欄は重過去にて、此内また各其階に従ひて未來、現在、過去の別あると次にいへるが如し。

此三過去中、またおのく未來、現在、過去の區別あり、是即ち前にいへる一階、三階、五階の性質に依て別るものなり。

例へば甲の一階行きたらん、この一階歸りてん、丁の一階去りけん、巳の去りなんの如きいづれも未來に屬し、乙の三階歸りつ、丙の三階去りけり、戊の歸りたり、は皆現在に屬し、甲の五階行きたれば、乙の歸りつれど、丁の行さしかど、庚の行さなければ、辛の歸りにまかばはすべて過去に屬するが如し。

四階の連名は、もこより現在に屬する活なれど、上に係辭ありて、之を結ぶ時は其結辭は正しく現在をあらはす例なり。

助動詞

現在に屬すとは例へば雲に隠るゝ月問ひくる人といひ、又受辭につゞきては月の雲に隠るゝを、人の問ひくるにといふが如し、然るに上に係辭ありて月を雲に隠るゝ、といひ、人々問ひくる、といひ何かは月の雲に隠るゝといふ時は、親しく其現在の事となるなり、

第二〇五節

五階の已然は過去の活なれど、上に係辭ありて、これが結辭となる時は、性質變じて現在となる例なり、

過去の活とは前にいへる如く、行けば、歸れど、の如く、即ち月雲に隠るれば、人問ひ來れど、の如く受辭を得て過去となるものをいふ、然るに上に係辭ありて、月こそ雲に隠るれ、人こそ問ひくれ、といふ時は、性質變じて現在となるなり、

第二〇六節

自他

○動詞、助動詞の自他

動詞、助動詞には自他の區別あり、之を分ちて六種とす、自動、他動、能動、受動、役動、被役動、これなり、

第二〇七節

自動

自動とは被我的關係なく、其物自ら然るをいふ、花散る春暮る、といふ散る、暮るの如し、

おのづから然る詞  
みづから然る詞

第二〇八節

他動

他動とは他に關係しておこす動作をいふ、月を見る、字を習ふの見る、習ふの如し、

見るは其見る者、月に關係しておこす動作なり、習ふは其習ふ者、字に關係しておこす動作なり、他の關係によりておこす動作なるをもて他動といふ、筆を執る、書を讀む、道を學ぶ、人を教ふの如き皆同じ、

物を然する  
詞  
他に然する  
詞

此他動を古くは「物を然する詞」と「他に然する詞」との二格に分ち、例へば「金をあづかる」、「書を借る」といふが如きは「物を然する詞」とし、「金をあづくる」、「書を貸す」といふが如きは「他に然する詞」とえたり、然れどもこれら共に他に對して起す動作なるを以て、今は皆之を他動と稱す、但し他動の名は穩當ならざれども姑く一般の稱呼に従ふなり、

第二〇九節

能動  
能動とは其能力の十分に然かなし得らるゝ動作を云ふ、思ふ儘に寫さる、快く働かるの寫さる、働かるの如し、

其能力のよく十分に寫し得らるゝなり、其能力のよく十分に働き得らるゝなり、我を忘れて歩かるといふ、三時間には行かるといふ、類皆同じ。

おのづから然せらるゝ詞

此能動は古くは「おのづから然せらるゝ詞」と名稱せり、此能動以下に自他の區別あり、委しくは下にいふべし。

第一一〇節 受動

受動とは彼より此に受くる動作をいふ、敵に攻めらるゝ、人に毆たるの如し、

彼より此に加へらるゝ動作なり、人に信せらるゝ、友に問はるゝの類皆同じ。

受動は自他なきものは能動と同じけれども、自他あるものは能動と全く相反す、又此能動、受動は輕き崇敬詞にも用ひらるゝ、委しくは下にいふべし。

第一一二節 役動

役動とは彼を役して起さしむる動作をいふ、書を讀ます、又は讀ましむといひ、木を植ゑさす、又は植ゑしむといふが如し、

他に然せしむる詞

甲より乙に命令して然なましむる動作なり、人に求めさす、又は求めしむといひ、犬を打たす、打たしむといふ皆同じ、此活は古く、他に然せしむる詞」と名稱せしものなり、

第一一二節 被役動

被役動とは、彼の使役に依りて、此におこる動作をいふ、書を讀ませらるゝ、讀ましめらるゝ、木を植ゑさせらるゝ、植ゑしめらるゝ、こいふが如し、

甲よりの命令を受けて乙がなす動作なり、人に求めさせらるゝ、又は求めしめらるゝといひ、犬を打たせらるゝ、打たしめらるゝといふ皆同じ、

他に然せしめらるゝ詞

此活は古く、他に然せしめらるゝ詞」と名稱せしものなり、被役動は重き崇敬詞にも用ふ、下にいふべし。

能動、受動、役動、被役動の四種は、助動詞を得て始めてその活をあらはすものなり、  
能動と受動とは、二種の助動詞にして、役動と被役動とは各三種の助動詞なり、左の表に依りて之を知るべし、

第一一三節 (第一能受、役、被役動表)

第六表 能受、役、被役動表

本表 標目	用言 號數	一階 將然	二階 連用	三階 截斷	四階 連名	五階 已然	六階 希求
(一)	三九	ま	れ	る	る	る	れよ
(二)	四〇	ま	られ	らる	らる	らる	られよ
(三)	四一	ま	せ	す	する	すれ	せよ
(四)	四二	ま	させ	さす	さする	さすれ	させよ
(五)	四三	ま	まめ	まむ	まむる	まむれ	まめよ
(六)	四四	ま	せられ	せらる	せらる	せらるれ	せられよ
(七)	四五	ま	させられ	させらる	させらる	させらるれ	させられよ
(八)	四六	ま	まめられ	まめらる	まめらる	まめらるれ	まめられよ

用言圖の號數を示すものは、參照して其作用および連合の格を知らしめんが爲めなり、  
能動と受動とは右表中(一)(二)の二種にして、四段活と、なら變格とは、其一階より(二)に連  
り、上下一段活、上下二段活と、かゝ變格とは、其一階より(三)に連る格なり、

役動は、表中(三)(四)(五)の三種にして、四段活と、なら變格とは、其一階より(三)に連り、上下  
一段活、上下二段活と、かゝ變格とは、其一階より(四)に連り、(五)へは上一段活をはじめ、諸  
活に通じて、其一階より連る格なり、  
被役動は、表中(六)(七)(八)の三種にして、四段活と、なら變格とは、其一階より(六)に連り、上  
下一段活、上下二段活と、かゝ變格とは、其一階より(七)に連り、(八)へは上一段活をはじめ、諸  
諸活に通じて、其一階より連る格なり、

能動以下の助動詞が、動詞に連る格は左の第七表にて知るべし、

前文已に を述べたりといへども、猶その委曲を示さんが爲めに第七表を掲ぐ、

第七表 能動以下動詞連續表



(第二)能動以下動詞連續表

活段二上	段下活一	活段一上	活段四
捉下悔恨伸閉掘起 むりみひちしき	殆蹴 ねけ	居射見于煮着 むみひにき	成進習立寫退 らまはたさか
格 變	活段二下	格 變	
爲 來 せ こ	植枯絶求替連出任受得 ゑれえめへねてせけえ	有 去 ら な	

七	四	二	六	三	の第一
役 被	役	受 能	役被	役	受能
させられ、させらる、 させらるゝ、させられよ、 させらるゝ、させられよ、 させられよ、	なせ、なす、なする、 なすれ、なせよ、	られ、らる、らるゝ、 らるれ、られよ、	せられ、せらる、せらるゝ、 せらるれ、せられよ、	せす、する、すれ、せよ、	れる、るゝ、るれ、れよ、

八	五の第一
動 役 被	動 役
まめられ、まめらる、 まめらるゝ、まめらるれ、 まめられよ、	まめ、まむまむる、 まむれ、まめよ、

第一五節 自動以下六種活用原則

自動以下六種の詞の活用は、左の表に依りて其格を知るべし、

古來自他の活用を示したるもの妙からずといへども、いまだ其原則を言ふものあらず、又受動、被役動、の自他に至りては誤るもの多し、此に掲ぐるものは、用言圖載する所に本づき、自他の語は、更に之を加へて其例を示すものなり、抑々自他の活用は詞毎に其趣を異にし、一般動詞の如く、一種類同一軌の活用をなすものにあらずといへども、此例に依て之を推さば、いかなる詞も、自動以下六種の活用の格を明に知るを得べし、

自他の活用は詞毎に其趣を異にすとは例へば生く、起く、は共に加行上二段の活なり、而して生くは下二段活に生け生ぎと活き、四段活にも生か生ぎと活けども、起くは下二段活に起けとは活かず、四段活にも起かとは活かず、又煮る、似る、は共に奈行上一段活なれども、煮るは下二段活に煮ゆと活き、似は似ゆとは活かざるが如きをいふなり、

本表に示す詞きする、させらるゝの類、實はきす、させらるゝの如く三階にて記すべきを、上下二段と四段との分別を明かにせんがために、すべて四階よりいへり、

第八表 自動以下六種活用表

蹴 踏 起 堀 閉 伸 恨 悔 下 捉

蹴	踏	起	堀	閉	伸	恨	悔	下	捉
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
他	他	他	他	他	他	他	他	他	他
自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
受	受	受	受	受	受	受	受	受	受
役	役	役	役	役	役	役	役	役	役
動	動	動	動	動	動	動	動	動	動
被	被	被	被	被	被	被	被	被	被
動	動	動	動	動	動	動	動	動	動

百三十一

着 責 干 見 射 居

着	責	干	見	射	居
上	上	上	上	上	上
下	下	下	下	下	下
他	他	他	他	他	他
自	自	自	自	自	自
受	受	受	受	受	受
役	役	役	役	役	役
動	動	動	動	動	動
被	被	被	被	被	被
動	動	動	動	動	動

(第三)自動以下六種詞活用表

動詞

百三十

成進習立移退植枯

なる	すいむ	ならふ	たつ	うつる	まりぞく					
なる	すいむ	ならふ	たつ	うつる	まりぞく	うらる	うらる	うらる	うらる	うらる
自	他	自	他	自	他	自	他	自	他	自
ならる	すいめらる	ならほさる	たてらる	うつらる	まりぞけらる	うららる	うららる	うららる	うららる	うららる
なまる	すいめまる	ならほまる	たてまる	うつまる	まりぞけまる	うらまる	うらまる	うらまる	うらまる	うらまる
ならする	すいめさする	ならほさする	たてさする	うつさする	まりぞけさする	うらさする	うらさする	うらさする	うらさする	うらさする
ならしむる	すいめしむる	ならほしむる	たてしむる	うつしむる	まりぞけしむる	うらしむる	うらしむる	うらしむる	うらしむる	うらしむる
ならせらる	すいめせらる	ならほせらる	たてせらる	うつせらる	まりぞけせらる	うらせらる	うらせらる	うらせらる	うらせらる	うらせらる
ならしめらる	すいめしめらる	ならほしめらる	たてしめらる	うつしめらる	まりぞけしめらる	うらしめらる	うらしめらる	うらしめらる	うらしめらる	うらしめらる

枯絶求變連出任受得

かる	たゆる	かふる	つらなる	いづる	まかせる	うける	えらる
かる	たゆる	かふる	つらなる	いづる	まかせる	うける	えらる
自	他	自	他	自	他	自	他
かれらる	たやさる	かへらる	つらねらる	いでらる	まかせらる	うけらる	えらる
かれらる	たやさる	かへらる	つらねらる	いでらる	まかせらる	うけらる	えらる
かれさる	たやさる	かへさる	つらねさる	いでさる	まかせさる	うけさる	えさる
かれしむる	たやしむる	かへしむる	つらねしむる	いでしむる	まかせしむる	うけしむる	えしむる
かれせらる	たやしめらる	かへせらる	つらねせらる	いでせらる	まかせせらる	うけせらる	えせらる
かれしめらる	たやしめらる	かへしめらる	つらねしめらる	いでしめらる	まかせしめらる	うけしめらる	えしめらる

成 來 爲 往 居

な	い	す	きた	く	な
る	わる	る	たる	る	す
		する	きたす		他
な	い	せ	他	自	他
ら	なる	らる	きたらる	こ	な
る	らる	る	きたらる	らる	さ
		きたる	きたる	こ	ら
な	い	せ	きたる	こ	ら
ら	なる	らる	きたる	らる	さ
る	らる	る	きたる	こ	ら
		きたる	きたる	らる	さ
な	い	せ	きたる	こ	ら
ら	なる	らる	きたる	らる	さ
る	らる	る	きたる	こ	ら
		きたる	きたる	らる	さ
な	い	せ	きたる	こ	ら
ら	なる	らる	きたる	らる	さ
る	らる	る	きたる	こ	ら
		きたる	きたる	らる	さ
な	い	せ	きたる	こ	ら
ら	なる	らる	きたる	らる	さ
る	らる	る	きたる	こ	ら
		きたる	きたる	らる	さ
な	い	せ	きたる	こ	ら
ら	なる	らる	きたる	らる	さ
る	らる	る	きたる	こ	ら
		きたる	きたる	らる	さ

他動はすべて他に關係して起す動作をいふものなれど、其内また自他の區別あり、花を見る。花を見する。は共に花に關係して起す動作なれば、他動なれども、花を見る。は自身之を見るものにて自なり、花を見するは人に見するものにて他なり、

他動の名稱の穩當ならざることは已にいへるが如し、畢竟他動は、他に關係して起す動作なれば、應動ともいふべき程のものなり、衣服を着るも着するも皆衣服に關係して起す動作

第一一六節 他動の自他

第一一七節 能動、受動の自他反對

能動、受動の活用、自他なきものは同一なれども、自他あるものはその自他全く反對す、且役動、被役動の活用の如き、共に第八表にて明かなるべしといへども、尙ほ左に二三の例を示すべし、

受動は、畢竟受身よりいふものなれば、其活用反對するは當然の事なり、

第九表 能受、役、被、役、自他、明細表

能	動	受	動	役	動	被	役	動
思フ儘ノ衣服ヲ我ハ	彼ヨリ衣服ヲ我ニ	我が衣服ヲ彼ニ	我ヨリ彼ニ	我ハ彼ヲシテ他ニ	甲ヨリ乙ヲシテ我ニ	乙ヲシテ我ニ	甲ヨリ我ヲシテ乙ニ	乙ヲシテ我ニ
(自) させらる	させらる	させらる	させらる	させしむ	させしむ	させしむ	させしむ	させしむ
思フ儘ノ衣服ヲ彼ニ	我が衣服ヲ彼ニ	我ハ彼ヲシテ他ニ	甲ヨリ我ヲシテ乙ニ	乙ヲシテ我ニ	甲ヨリ乙ヲシテ我ニ	乙ヲシテ我ニ	甲ヨリ我ヲシテ乙ニ	乙ヲシテ我ニ
(他) させらる	させらる	させらる	させしむ	させしむ	させしむ	させしむ	させしむ	させしむ

起			
朝疾ク我ハ (自)おささる	人ヨリ先ニ我ハ おこさる	我ハ彼ヲ おささす おさしむ	甲ヨリ乙ヲシテ我ヲ おささせらる おさしめらる
兎角ニ人ガ (他)おこなる	我ヨリ先ニ彼ニ おささる	我ハ彼ヲシテ他ヲ おこなす おこなしむ	甲ヨリ我ヲシテ乙ヲ おこなせらる おこなしめらる

他はこれに准じて知るべし、

第二八節

崇敬詞

崇敬詞の動詞助動詞

○崇敬詞

崇敬詞とは、他を崇敬する時に用ふる詞なり、動詞あり、助動詞あり、動詞助動詞の連合あり、左に其一斑を示すべし、

崇敬詞の動詞は給ふ、まします、おはすの類、同助動詞はるらす、さす、まひの類、動詞助動詞の連合は書かせらる、讀ませ給ふ、行かしめ給ふ、聞えさせらるの類なり、

動詞の崇敬詞

たまふは行四段

あそばすは行四段

おはします同

動詞の崇敬詞

きこしめすは行四段

おろしめす同

おぼす同

おぼしめす同

まします同

おもほす同

おはすは行變格

いまそかる

いますかる同

これらは他の上にふもの、

たてまつるは行四段

まゐらすは行下二段

たまふるは行下二段

まうすは行四段

はべるは行四段

さぶらふは行四段

これらは自の上にふもの、

助動詞の崇敬詞

助動詞の崇敬詞は、前に示せる第六表能、受、役、被、役表に載するものと全く同じくして、其[三][四]なる能、受動に係るものは輕き崇敬詞に用ひ、[三][四][五]なる役動には給ふ、おはします、ましますなどいふ動詞を添へ、[四][七][八]なる被、役動詞と共に重き崇敬詞に用ふ、

輕き崇敬詞

動詞

給ふおはしませすませしませなふ語を添ふとは退かせ給ひ起させおはしまして立たしめをしくといふが如し、重き崇敬詞なり。

被役動はその儘重き崇敬詞となる退かせらる起させられて立たしめられければの如し。

崇敬詞よりいふ時はもとより能動以下の差別なし、と知るべし。

第一九節 崇敬の動詞 助動詞連合

崇敬に係る動詞、助動詞の連合は、主として第六表三四五なる役動の助動詞に、給ふおはしますますなごいふ動詞の添はりたるもの、又は奉らしめらる參らせらる申させ給ふの類、及び第六表四七の類なり。

古き敬語

古くは動詞を一種に活用して敬語とせり、聞こす、聞かす、知ろす、知らす、立たす、通はす、思ほす、思ほすの類なり。

但しこれらもすは令の意にてくはしくいへは助動詞となるべきものなり。

第二〇節

○動詞上一段活以下六種の區別、及び受辭等、今一々切圖を添

切圖

へてその詳細を説明すべし、形容詞、助動詞、もまた之に准ず、

切圖とは用言圖に對して言ふものにて、用言圖中おのゝ其の類を切り斷ちて示せるものなり、六階とは將然はじめの六階、受辭とは此六階中、第六階希求の外、おのゝ之を受くる辭をいふ、左の圖につきて之を知るべし。

第三節 ○上一段活

階級	性質	係辭	時	着	羨	干	見	射	居	段						
										一階	二階	三階	四階	五階	六階	
將	然		未							すてじゆんあは	たけつめつ	な	な	な	な	な
階	連		來							そ	な	な	な	な	な	な
階	用									てしゆんあは	な	な	な	な	な	な
三	截		現							ちからんし	な	な	な	な	な	な
階	斷		在							な	な	な	な	な	な	な
四	連	な								な	な	な	な	な	な	な
階	名	何								な	な	な	な	な	な	な
五	已		過							な	な	な	な	な	な	な
階	然		去							な	な	な	な	な	な	な
六	希									な	な	な	な	な	な	な
階	求									な	な	な	な	な	な	な

上一段の名

上一段といふ名は、此段はかなはまやわ六行の第二音なるきにひみゐるといふを一二階とし、三四五六階にてはこれにれよの辭の添はるのみにて、只一段のみの活用なれば、一段といふ、これを上といふは、下一段活と相對し、彼は第四段音よりするもの、此は二段音よりするものなれば上と稱して區別せるなり、

第二三節

一階二階

此活は一階、二階、ごもにきにひみゐるにして、その連續によりて或は一階となり、又は二階ともなる、

例へば着ず、煮で、干じ、見ぬ、射ん、居まし、なごい、ん時は、すで、じぬ、ましは、いづれも一階の受辭なれば、即ち一階にて將然なり、又さかたね(著連)にたつ(煮羨)、ひわがる(干よ)、みかはす(見交)、みつゝく(射羨)、あはす(居合)、なごい、んときは、連用となり、着て、煮けり、干けん、見つる、射し、居つゝ、なごい、んへば、即ち二階の受辭につゞくものなるをもて、共に二階の連用となるが如し、

一階は受辭を得て、始めて其將然の性質をあらはすもの也。

例へば羽織をき、魚をにといふのみにては、いまだ將然の性質をあらはさず、羽織を着すと  
か、きまじとか、魚をにんとか、にぬとかいはざれば、將然とはならざるが如し。

三階四階

又三階四階はごもにさるにるひるみるゐるにして、係辭  
の有無、又はその連續によりて、三階ごも、四階ごもなるなり。

例へば羽織を着る、魚を煮るといへば、その儘されて續かず、是れ即ち截斷にて三階なり、又  
着るゆり、煮るらんなどいへば、之を受くるゆりらんは三階の受辭なれば、是亦三階截斷な  
り、着る羽織、煮る魚などいへば、名に連るもの、又上に係辭ありて、其結となれば、即ち四  
階、又着るかな、煮るまでなど、かなと受け、までと受くるも、四階の受辭なれば、是また四階  
なり。

四階の活は上にぞかやなん何の係辭ある時は、結辭となるをもて截斷し、現在となるとは  
前にいふが如し。

此三階の受辭ごごもへしらんらし等には此段に限り、きにひ

みいゝるよりも續くることあり。

よろづ代に見どもわかめや、あみどもあくべき浦ならなくに、萬花とやみらん、きときはに似  
べき六時、つみて煮らしも、あひねもすにみどもあくべき浦にあらなくに、萬きてみべき人も  
あらしな後、さすがにおきむらんあやしくて、執事乎。

五階

五階はきれにれひれみれいれゐれにて、此階はこそその結辭ご  
なるの外は、ばごごもの受辭を得て、始めて已然の性質をあら  
はすものなり。

例へば羽織をきれ、魚をにれといふのみにては、いまだ已然の性質をあらはさざるのみな  
らず、語を成さるなり、羽織をきれば、魚をにれば、なせいで、始めて已然となるが如し。  
但上にこそその係辭ある時は受辭を得ず、直ちに截斷し、已然の性質變じて現在となる事  
前にいふが如し。

六階

六階はきよによひよみよいよるよにて、此階は希求にかゝる  
ものなり、受辭なし。



羽織をさよ魚をによの如し。

第二三節 各階區別 係辭結辭

一階より六階に至るまで、各階の區別及び係辭、結辭等の事は、動詞、形容詞、助動詞に通じて皆これに准知すべし。

各階の區別、係辭、結辭は動詞、形容詞、助動詞に通じていづれも同一なれば、以下各種の活につきて一々之を言はず、本文に准じて知るべし、但し受辭にいたりては、形容詞、助動詞は、おのゝ動詞と異なるものあり、各其下に於て之を示すべし。

第二四節 上二段に活

此上一段に活く詞は極めて少し。

○さるは着る、一語のみ○にるは似る、肯煮る、蒸煎、○ひるは干る、乾涸、鑷る、嘔る、嘔る、○みるは見る、觀看、監る、監る、惟る、惟る、願る、試る、夢る、後見る、(いづれも見るの他語と連合して一語となるもの)ひるは射る、弓射る、鏑る、沃る、○ゐるは居る、牽る、牽る、帥將、用る、須、突居るの類に出でず。

第二五節 上二段受辭

受辭、係辭、結辭等の事は已に言へりといへども、猶右にあげたる切圖の上につきて、其詳細を左に示すべし。

受辭

一階は

- きず 羽織はきずして袴のみはく
- にで 魚はにで野菜を食ふ
- ひじ 汐はまだひじ
- みぬ 書を読みぬ日はなし
- いん いざ弓をいん
- あまし 今日の家にあまし

他は右に准じて知るべし。

右は一階にひみぬの六種につきて受辭にかゝる一斑の例を示せるなり、今、更に一階のさより受辭にかゝる例を示さば○羽織もさで急ぎ出づ、○今日は羽織はきじ、○羽織をさぬ人なし、○羽織はさん袴ははかじ、○羽織もさし袴もはかまし、○羽織をさば袴ははかじ、の如し、にひみぬ皆これに准じて知るべし。

二階

二階は

- きこそ 服をばきこそしつれ
- にぞ 父ににぞあたる
- ひか 今はひかしつらん
- みや 人のみやする
- いは 弓をいはあたれど
- おも 家におもすべし

他は右に准じて知るべし、

尙は二階のにて受辭にかゝる例をいはり、○魚をにて贈る、○魚をにし時、○魚をにか  
 ば、○父にたり、○誰にけるにか(けるはけり)と同じ(魚をにづるに、○魚をにぬるはど、  
 ○肉をにつく酒のひの如し、きひみぬ、皆これに准じて知るべし、

三階

三階は

- きるめり 彼は常に粗服をきるめり

四階

四階は

- にらん 魚をにらん時
- ひるべし 今は汐もひるべし
- みるらし 人も見るらし
- ひるこ みるこそすれど中らず
- あるこも あるこそあはじ

他は右に准じて知るべし、

三階のひるにて尙は例をいはり、○汐やうくひるめり、○今は汐もひるらん、○夕方には  
 ひるべし、○汐やひるらし、○汐もやひると、○汐はよしひるとも、の如し、

- きるかな 垢づけるものをもきるかな
- にるまで にるまでもなし
- ひるに 汐のひるによりて

- みるを 人の見るをいかに
- ひるより 弓をひるよりして
- ゐるか ひきゐるが中に

他は准じて知るべし、

四階のみるにて尙ほ例をいはず、○目を留めてみるに、○人のみるを厭ひ、○君はみるか、  
 ○みるやまされる、○みるはいかに、○みるも苦しげなり、○我はみるよ、○花をみるかな、  
 ○又あひみるまで、○みるより聲かけ、○みるこそうれしけれ、○余は可とみるなり、此な  
 りは決定の如し、

五階

五階は

- されば されば忽ち縦びぬ
- にれど にれどにえず
- みれども みれども見えす

他は准じて知るべし、

みれにて尙ほいはゞ○みれば中らぬ、○みれど中らず、○みれどもみれども手ごたへなし、  
 の如し、

此受辭は文法上最も必須のものなる事は總論第八節に於ていへるが如し、されば今煩を  
 顧みず、一々其例を示せり、以下各段の活につきても、教師は力めて此受辭の事を丁寧反復  
 開説し、生徒をして活語と受辭との連続法に熟せしむべし、

第二六節

上一段

係結

係辭結辭は左の如し、

- 四階なるぞかやなん何の結辭、上一段にありては左の如し、
- 着○きる 羽織をぞきる
- 煮○にる 魚をかにる
- 干○ひる 汐やひる
- 見○みる 花をなんみる
- 射○ひる 何をかひる
- 居○ゐる いづこにかゐる

例へば、袴ははかで羽織をどきる、君は羽織をかきる、汝は羽織をやきる、何故羽織のみは  
きる、寒ければ羽織をなんきる、といはんが如し、他は皆これに准じて知るべし

五階なるこそその結辭は

着○きれ 羽織をこそきれ

煮○にれ 魚をこそにれ

干○ひれ 沙こそひれ

見○みれ 花をこそみれ

射○ひれ 弓をこそひれ

居○ゐれ 家にこそゐれ

此他、父にこそ似れ、母には似ず、痛めてこそ腫れ、筆をこそ試みれ、錢をこそ鑄れ、軍をこそ  
帥のれなき皆同じ、

第二七節

下一段活

階級性質、係辭、時等は動詞、形容詞、助動詞を通じて、上一段に掲ぐる所と異なる事なけれ

は、以下一々之を記さず、

蹴	踏	段	聲
け	ね	かてじゆんめはきし な(圖)	
ける	ねる	こそやほしてま きたけつひるい な(動)	
けれ	ねれ	あらはへかまざり やんししじも な(動)	
けよ	ねよ	かまになよひ な(動)	

下一段の名

下一段の名は、此段はかな二行の第四音なるけねといふを一  
二階とし、三四五六階にては、これにるれよの辭の添はるのみ  
にて、上一段と同じく、只一段だけの活用なればなり、下といふ  
は前にもいふ如く上一段に對し、彼は第二音、此は第四音なれ  
ば、第二音を上とし、第四音を下として、下一段と稱するなり、  
此活は一階二階ともにつねにして、その連續によりて或は一

第二八節